

先生に学校を!!

人格校長の軌跡

都
みやこ田
だ忠
ちゆう次
じ郎
ろう

校長退職で揺れる

昭和三年三月、鳥取県内の中等学校長のうち、三人が退職することになった。数少ない中等学校長の中で、一挙に三人の退職ということは前例がなかった。だから県教育界は大きく動搖したが、倉吉中学校では、それがもつとも深刻だった。

このとき、倉吉中学校長の都田忠次郎は、五六歳だったが、退職を指名された者の一人だった。予期しないことで関係者は驚いたが、ことに教頭の伴乙雄は、校長に殉じて辞表を提出した。県の行政当局は、教頭の辞職

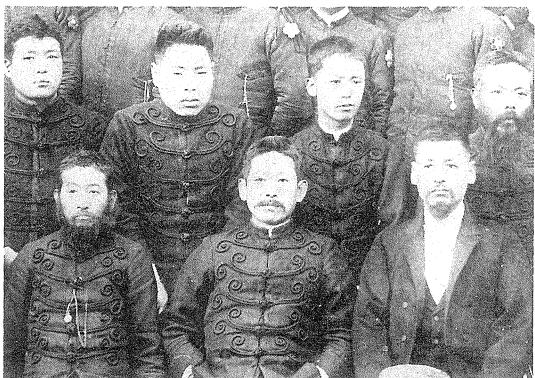
を受け入れてしまった。このことから同窓会の反対運動が起こり、地域の社会問題にも発展することになった。

まず同窓会が倉吉町内で大会を開き、都田校長と伴教頭の留任を求める決議をした。その宣言の中に「我母校倉吉中学校は、県下中学校中その歴史は浅しいえども、都田・伴兩先生の如き人格識見ともに卓絶せる人を得て校風大いに興り、教化日に揚り、郷土を擧げてその徳風を景仰す。……教育の理想郷はまさに我が郷土に實現せられんとする」という言葉があった。これを破壊しようとするのが県当局だ、というのである。

同窓会の代表は、地域の有力者たちの応援を求めて県への陳情をしたけれども、県の方針は変えられなかつた。そして、新校長は県外から迎えることになつて、四月に入つて発令された。

同窓会にも在校生にも強い不満が高まつてゐるところに、新校長が着任することになつた。その日の午後、倉吉に着いた校長は、人力車に乗つて学校へ向かつた。学校にいた生徒たちは招集されて、校門の前へ校長歓迎の行列を作らせられた。

人力車で通過しようとする校長に、生徒が「降りてください」と言つたと伝えられる。また校長の後姿に向かつて、生徒たちが



明治32年の大江礎吉（前列中央）と都田忠次郎（後列左から2人目）

倉吉中学の黄金時代

都田忠次郎は、学生の着るような詰襟の洋服を着てゐることが多かつた。都田の生地は境港市だつたから、言葉にはこの地方の弓が決なまりが強く残つていた。都田が勤務した

のは鳥取市と倉吉市だったが、彼の弓が決まりは消えなかつた。こんなことで、スマートなどころはどこにもなかつたけれども、都田忠次郎が倉吉中学校の黄金時代を築いたといわれる。

都田は大正九年四月から昭和三年三月まで八年間、倉吉中学校の校長として在職した。

ここに着任したときから都田は、全校の修身の授業を自分で担当した。低学年は三学級の合併授業で、畳敷きの道場に正座をさせて講義した。授業は調息ということから始まつた。

生徒は正座して目を開じ、自分の呼吸を数えながら精神の集中を図るのだ。このときに笑い声でももらすものがあれば、落雷のような激しさで都田は生徒をしかりつけた。都田の授業で、人生に処する基本的なものを教えられたと卒業生たちは言つてゐる。

都田校長は精力的な読書家で、手から書物を離すことがないほどだつたといわれる。彼の授業は、そんな読書生活で支えられていたから、生徒に与える影響は強かつた。

倉吉中学校は成立がおそく、伝統は浅かつたが、都田の在任中に運動部の力が急伸した。とくに昭和二年には、神戸高等商業学校主催の庭球全国大会に優勝し、その後の連続優勝に道を開いた。またこの年には、柔道部が竜谷大学主催の全国大会に出場して、これにも世間では「都田塾」と呼んでいた。地域の人たちは、黄金時代の倉吉中学校の姿をここに求めていたのである。

山陰公民学校は八年間にわたつて経営されたが、当時の倉吉町に移管されて町立の商業学校になつた。都田校長と伴教頭の二人が、ともに病氣のために設立の理想が守れなかつたことも一つの契機になつてゐる。しかし、この地方になかつた商業学校を実現したという、歴史的な役割を果たしたことになる。

教師の生涯が残すもの

都田忠次郎は明治二四年の鳥取県尋常師範学校の卒業生で、卒業と同時に、附属小学校の訓導に採用された。在校中から、都田の人物が注目されていた結果であろう。都田は、師範学校入学以前に、「渢の目の聖人」といわれた村上龍の私塾で教えを受けた。彼の母は、「村上先生のようになれ」と都田をよくさことしたといふ。

附属小学校教師としての都田は、教育会雑誌に五段教授法の學習指導案を発表するなど、県下の教育改良に積極的に取り組んだ。そこ

の人たちの敬愛の的になつてゐた。

都田忠次郎と伴乙雄の復職が不可能と分かっただき、同窓生の中から新しい学校を作ろうという声が起つた。これが倉吉地方の住民運動になつて、一年後に山陰公民学校が実現することになった。それは、都田を校長とし、伴を教頭とする学校だつた。



山陰公民学校で自彌術を実行させているところ（昭和4年）



山陰公民学校の校舎（昭和5年）

連休を利用して、夜行列車で往復するというやり方だつた。早朝に帰着すると、部員は校長宅を訪問して深くわびたが、校長は一度勝たせてやりたかった。勝つてよかつた。疲れているだろうが、今日は休まず授業を受けるように」と言つて、とがめなかつたといふ。

校長の飾らない人柄、確固たる信念、弓が浜なまりの情熱的な雄弁、生徒に対する深い情愛などは、生徒や職員ばかりでなく、地域

に主事（現校長）として着任したのが、長野県出身の大江磯吉である。彼は高等師範学校の卒業生として広く深い学識をもつて生徒の尊敬を集めた。

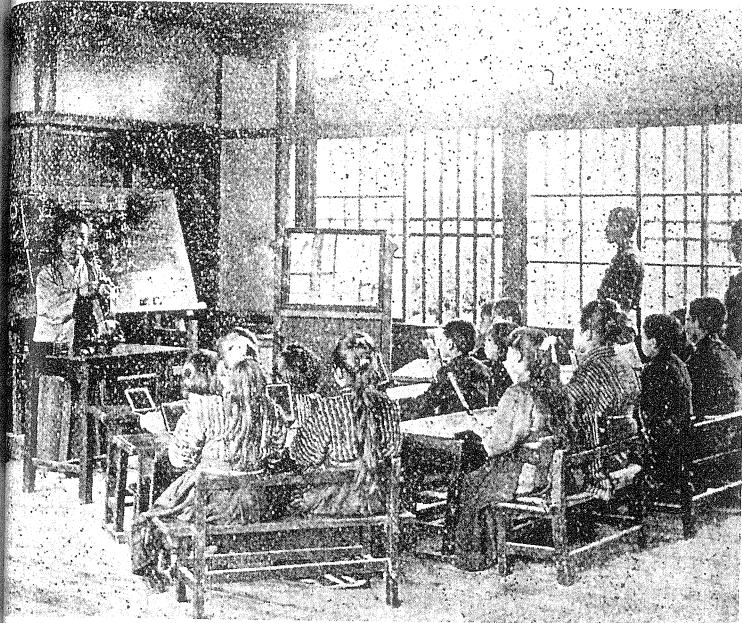
大江の学究的な生活態度と明快な言説とは、附属小学校の職員から深い信頼を寄せられるものであつた。中でも都田忠次郎はもつとも大きく大江の影響を受け、哲学や教育学の研究を進めた。都田が修身と教育との中等学校教員免許を受けるようになつたのは、ここに由来していると思われる。

明治三年、大江は休職となつて鳥取を去るが、そのとき同時に休職处分を受けた一人が都田忠次郎である。大江に殉じたと言つていいだろう。二年後に大江が死去したときは、都田は教育会雑誌に追悼文を書いて「吾は君を師として事へ、友として交わり、主として仕えき」と述べた。信ずるところに向かつては、何物にも恐れない気迫にみちたものであつた。

失意にあつた都田は、倉吉農学校に迎えられ、その精励をもつて期待にこたえた。さらには鳥取高等女学校の校長に就任し、ついで倉吉中学校の校長となつて、黄金時代といわれ名聲を築いた。質素な生活を守りながら、高い精神性を求めてやまない都田の人格が、地域の教育に深い影響を残したものである。

山陰公民学校の創立

盲児・啞児の慈母 福田与志



授業風景



とし、聾学校では「しひたるみみ」としている。女史の戸籍名は福田ヨシであるが、七つ年上の兄福田平治（山陰育児院創設者）の妻がヨシだったのです。まさかぬように、妹のヨシを与志とし、妻のヨシをヨシ子とした。よつて、墓石にも福田与志としているが、この文の前段は、戸籍名のヨシを使う。

ヨシは、明治五年、父清七、母いその三番目の子として生まれた。福田家は、鳥取市で、運送業をしていた。そのときの家族構成は、曾祖母、祖父母、父母、兄平治、姉千賀、ヨシの八人で、ほかに住み込みの雇人者が三人もいた。

活動家の祖父平兵衛は、島根県庁御用の印刷所をはじめるため、祖母お仲と兄平治を伴

い、明治一年に、松江に移住した（明治九年鳥取県は島根県に合併）。その後、祖父、次いで父が死亡し、ヨシが松江の人となつたのは、翌一二年の一月であつた（姉の千賀と妹の民子を母の実家に残し、曾祖母と母と三人人）。

明治一三年の松江での正月を、ヨシは曾祖母、祖母、母、兄、自分の五人家族で迎えることができた。兄の平治は一五歳になつたばかりで、ありながら、印刷業発展のために、め

一、しひたるまみに 学びえぬ
教へ子思ふ ひとすじに
さらにわけいる 文の山
すべてを愛の にえとして
二、鬼神なかす まごころに
園生の基さだむべく
ながき月日の あらきばり
いかに苦しき ものなりし
ようやく根ざし ととのひて
やがては花の香にみつる

三、さはれ基礎 いやかたく
ながき月日の あらきばり
いかに苦しき ものなりし
ようやく根ざし ととのひて
やがては花の香にみつる

四、心こめたる つちかひに
残せる教へ のりとして
心こめたる つちかひに
いよよさかゆる 園の花

五、けふしも君が 面影の
前につどひて かたりあひ
いざをししのぶ このまどる
いざみそなはせ ほほえみて

右は、盲児・啞児の慈母福田女史へ捧げた追悼歌である。毎年その命日に当たる一月二八日には、追悼式を行い、この歌をうたつて、遺徳を偲ぶことになっている。歌詞は難解であるが、追悼歌の性質上、これまで今もうたいつづけている。しかし、その後、聾学校が、盲学校と聾学校に分かれたので、歌詞の最初は盲学校では「しひたるまみに」

ざましい活動をつづけていた。亡祖父の置いた礎石はゆるがず、祖母と平治の苦労は、みのりつつあつたのである。鳥取での父の死という経過によつて、再会した兄妹が、どのように親密さを深めていたか想像されよう。

この年八歳のヨシは、二月五日、島根県女子師範学校附属小学校に入学した。折から錦織竹香女史が教生としてきており、鳥取弁の歌詞の最初は盲学校では「しひたるまみに」

から再び因幡、伯耆を分離し鳥取県となつた。それと同時に、目先の早い平治は、更に鳥取分工場を設置し、新潟府の印刷用達の命をうけるに至つた。

一方、ヨシは五月五日に

「其方儀平素学事格別勉励殊二行状正シク
他ノ標準トモ相成候ニ付半紙一束賞与候
事 島根県」

の賞をうけたが、その松江女子師範学校附属小学校は、九月二十日に廃校となり、九月二三日に、島根県松江師範学校附属小学校となつた。そして、翌明治十五年四月二十五日、小学校等科卒業し、「小学校初等科卒業候ニ付為書籍料金武拾錢賞与候事 島根県」の賞をうけた。平治一七歳、ヨシ一〇歳である。

明治十九年、ヨシ一四歳、二月一五日に、附属小学中等科六年前期卒業し、三月二〇日に、島根県師範学校へ入学志願し、三月一

日に仮入学、四月一四日に本入学を許された

である。高等科卒を資格とする師範学校に、中等科六年後期にも達しない者が、入学を許されたことは、全く異例、ヨシの実力がいかに高く評価されていたかがよく分かる。

明治二十二年、ヨシは一八歳の若さで島根県尋常師範学校（明治一九年八月五日、島根県師範学校を島根県尋常師範学校と改称）を七月一二日に卒業し、次のように即日訓導となつた。「尋常師範学校ヲ卒業ス 島根県尋常師範学校 明治廿三年七月十二日ヨリ明治廿八年七月十一日マデ五箇年間小学校（高等小学校二於テハ女兒）教員タルコトヲ免許ス 島根郡本庄小学校（注、本庄は松江市近郊の村、現松江市本庄町）訓導（月俸八円）島根県」

尋常師範学校（明治一九年八月五日、島根県師範学校を島根県尋常師範学校と改称）を七

月一二日に卒業し、次のように即日訓導となつた。「尋常師範学校ヲ卒業ス 島根県尋常師範学校 明治廿三年七月十二日ヨリ明治廿八年七月十一日マデ五箇年間小学校（高等小学

校二於テハ女兒）教員タルコトヲ免許ス 島根郡本庄小学校（注、本庄は松江市近郊の村、現松江市本庄町）訓導（月俸八円）島根県」

を隆盛ならしめたのである。現松江市殿町の

県庁前の元勧銀支店所在地の印刷所は、博広社と称し、従業員三十人を数えるほどになり、

平治氏としても、苦楽と共にしてきた祖母の死は、祖父の死や父の死よりも、はるかに痛くひびいた。平治氏は、祖母の死を重くみて、何とかして、その靈を慰めたいと誓うところがあつた。そして翌二九年正月、平治氏と与志女は、どくと詰合の機会があつた。その会話の内容は、二六年の水害以来松江に漂流児の多いこと、あの水害のとき松本氏の美舉があり祖母が心して口癖のようにほめていたことであつた。

このようにして、平治氏は与志女の全面的賛成を得て、その年の三月五日、第三回の誕生日を期して、松江育児院の看板を、博広社玄関入口にかけ、福田平治の社会事業が始まつたのである。六月末には、孤児九名を収容し、七月には孤児を市の阿羅波比神社東南の元宮司邸内に移し、一一月には妻の実母内藤信子刀自が養育の手伝いをするに至つた。

明治三十一年は、平治氏三二歳、与志女二十五歳の年である。育児院にいる孤児は二〇人を超えていた。孤児救済事業の発展策のみが念頭にある平治氏は、宗教的に新しい慰安の道を求めて、靈場枕木山（枕木山は本庄小学校附近）にのぼろうと思いついた。当時与志女は、勤務の本庄小学校の近くに一農家を借り



県立松江ろう学校に建つ頌徳碑②と県立盲学校にある胸像④

明治二六年、平治氏二八歳、与志女二一歳となつた。このどし一〇月に入るや、松江市は未曾有の大洪水に見舞われ、一〇日間も市街は水びたしになつた。市民は少なからぬ損害をうけたが、このとき、松江銀行頭取松本歎次郎氏が多大の救済を行つた。その美舉に、市民は深く感銘を受けたという。

明治二八年に祖母お仲は七〇歳をもつて病死した。鳥取生活五二年松江生活一八年の生涯であつたが、松江移住半年にならないとき、夫平兵衛を失い、年少の孫平治を助けて家業

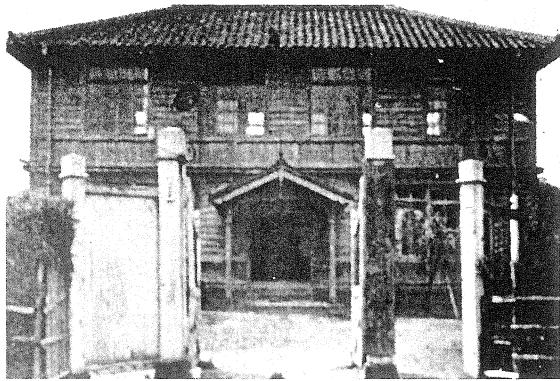
ていた。平治氏は、たえず協力してくれる妹と話したかつた。四月なかば過ぎた快晴の日曜日、平治氏と与志女と平治氏妻の妹内藤貞子女の三人は枕木山にのぼつた。この時、平治氏は与志女に対し、盲児・啞児の教育について研究するよう、しきりに吹き込んだ。思

うに社会事業の深奥に迫りたいと考へて、教育専門職の妹を盲児・啞児の教育に当たらせようとしたのである。本庄校の校庭にも啞児が就学もせずに時々遊びに来る。そのような障害のある子を見るたびに、与志女の胸はせつなかつた。自分はこのまま優良女教師で過してよいのか。兄の弱者救済の気持は自分にも流れている。何とかして、兄と歩調をあわせたいといふ意がわいてくるのであつた。

明治三十一年、与志女二六歳の五月、本庄小学校を辞し、前月視察した京都盲啞院の招きに応じて、同院の助教諭を拝命したのである。

明治三十一年、与志女二六歳の五月、本庄小学校に復帰し、孔子のいう「而立」に似て、女史の盲啞教育における識見と手腕は、ここに確立したのである。

三七年、女史三二歳、京都盲啞院で、発育の学級を担当し、また女子部舎監として盲児とも寝食を共にした。そして、時々思うこと



私立松江盲啞学校

郷上

神と人との愛されて その生涯を女子教育のために

上代 淑（じゆく）



生徒と語らう上代淑先生

ふたたびの就任

山陽学園は明治一九年、岡山のキリスト教信者たちが外人宣教師の助力のもとに創立した山陽英和女学校を前身とする。上代淑は開校四年目の明治二二年、大阪の梅花女学校を卒業した一九歳のとき、なおすんで勉学を希望していたが強く懇望されて、「神これを命じたまうが故に」ここに赴任し、裁縫・漢文・習字以外の全教科を担当する教師として、さらに寄宿舎の舍監として、自分よりも年長の生徒さへいた中で、岡山における教師生活の第一歩を踏み出した。教育者になることは、彼女の少女時代からの念願だったのである。

キリスト教系の梅花女学校に学んだ彼女は、

はやくから米国マウント・ホリヨーク大学の創始者メリーライオン女史の名を知り、日

ごろ「聖旨ならば、メリーライオンのような立派な教育者にならせたまえ」と祈つていった。卒任にいささかのためらいがあったのは、まさにそのためであつたが、その希望は明治二六年、二二歳のときに実現した。

マウント・ホリヨークはこの年、ただ一人の初めての日本人留学生上代淑を受け入れた。梅花時代から外人宣教師宅に寄寓して語学力は抜群であったが、四年間の留学中は死に物狂いの日々であった。専攻は生物学であつたが、語学力の不足やら、クラスメイト七〇余人中たつた一人の日本人だったことやら、今までの日本人には思いもよらぬ苦闘の連続であった。



第1回卒業生とともに(後列右から3人目)

い、二部合唱や輪唱の楽しさを教えるハイカラな先生であつた。

当時の岡山において最新、最高の知識を身につけていた上代先生の授業は、やさしい言葉で例を多く引いてわかりやすく、そして授業の合い間に「……に感謝せよ」「未知の人にも挨拶をこちらから」と、社会人としての心得を説いた。やがてこれらは上代先生の「お守り帳」として全卒業生の生活指針となつた。また、卒業式後の在校生・卒業生の送別行事として玄関前の石段で挙行される「きざはしの歌」の儀式がいまも山陽学園に受けつがれているが、これは、マウント・ホリヨーク大学の伝統的行事が移植されたものなのである。

つねづねピースメーカー（Peace maker）になれと生徒に諭し、有志の生徒を誘つて日曜学校の教師を務め、つづいて教会へ急いでオルガン奏者を務めるといった生活は、明治四一年の校長就任後も、その寄宿舎住いとともにかわるところがなかつた。

「わたくしは決して秀才ではない。それでただ一途に努力、努力でがんばつた。それによつて人々に卒業できたのである」と、努力のたいせつさをつねに生徒に諭していた。

明治三〇年、バチエラー・オブ・サイエンスとなつて帰国した彼女を待つていたのは、母校梅花女学校をはじめ新設の日本女子大学

上代先生のお守り帳

一般的には、たいくつだが居眠りすることもできない校長先生の修身が、この山陽では

もできない校長先生の修身が、この山陽では

金生徒によつて待たれ、そして卒業後も最も

英語・博物はもちろん、修身・地文・家事・音楽・体操など七科目を担当し、英語では徹底的に辞書を引くことを教え、音楽では楽器の

ない當時として音叉を用いて音感をとらえさせ、あるいは美しい声で英語の歌などをうた

印象に残る授業の一つであつた。洋行帰りにもかかわらず、紺がすりの單衣にメリングと黒縄子の打合せ帶といつた質素な姿で、先生は短いチヨークをしていねいに使い、どうどう使えなくなるとそれを生徒に与え、ものの命をたいせつにと親しく教えた。生徒は「お守り帳」と呼ぶ手帳をもつていて上代校長の訓話をメモし、つねに所持してくりかえし学んだ。

それらはのちに「上代淑先生訓話集」としてまとめられたが、例えば、「感謝を胸あてとして、心いっぱいに充たし、奉仕の誠を服して全身にみなぎらせ」どころ申したいのです」と、彼女の教育の基調であり、同時に山陽の建学の精神でもあつたものから、「一家の婦人が姑・嫁・親子の問題においてばかりでなく、その持ち前の優しさ、すなおさをだれにでも表わし、自分のまわりを愉快にし、明るくするということは真に大事な責任でござります」とか、「愚痴をいう事は人をも不愉快な気持ちにさせます」と、将来スマートな良妻賢母となるための教訓がこめられていた。

オリーブグリーンの風

明治一九年、山陽英和女学校として発足した山陽学園は、山陽女学校、山陽高等女学校、そして現在の女子中・高等学校に昭和四年

つた。これは、はじめ上代の私塾形式をとつたが、女性解放の風潮にともない昭和二年に

は山陽高女家政専攻科となつた。

家政専攻科は家事、裁縫に重点を置いたが、家政のみに偏することなく、倫理学、心理学、論理学、国文学、英語、法制経済などの一般教養を重視し、有名音楽家の演奏会や各界名士の講演会など独自の文化行事を実施した。

そこには、当時の日本で一般的に教育ある女性とされた高等女学校卒業者が「まず目ざめて、精神的にも、肉体的にも、形式をはなれ、虚礼を廃し、理解ある日々を工夫しなければならぬ」（大正八年、同窓会講演）というかねてからの上代の持論が盛りこまれていた。将来は総合女子大学までが考えられていたが、「私の力の足りなさを殘念がつてるのでござります」と昭和一五年の創立記念式で告白した。遺志は養嗣子上代暗三による昭和四年の短期大学開設で、ようやく一部が実現されることになつた。

「灰の中より立ち上がりましょ」

第二次大戦は、愛と奉仕の精神に生きる上代淑の事業を御破算にしたかに見えた。愛する学園は昭和二〇年六月の岡山空襲により完全に焼失した。

開学の山陽学園短期大学をもつ学校法人となるが、その間つねに愛と奉仕の精神を堅持しつつも、あえて教会に経営をゆだねることを

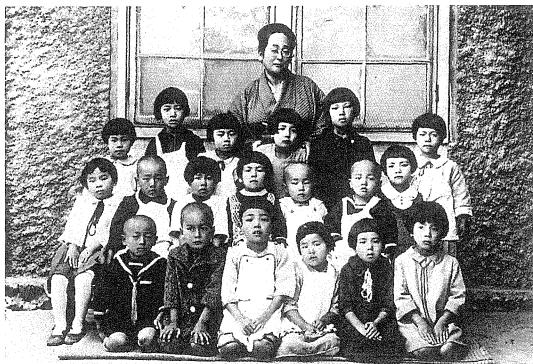
上代淑は実に没年まで日曜学校の教師をつづけていた。

久留島武彦、姉崎正治、ガントレット恒子らの名が見られる。これらの多くは上代との個人的交友や本校元教師といった人々であるが、これら知名士により山陽の名は世に広まり、県外女学校長の視察があいついた。

さらに教頭に入沢賢治を得て、庭球・排球・龍球部の育成に成果をあげ、これらスポーツの全国的に広く知られ、いつしか上代淑の名前と山陽高等女学校の校名が定着した。文化・体育の両面においてスクールカラーのオリーブグリーンのさわやかな風は、岡山のみならず全国的に広く知られ、いつしか上代淑の名前と山陽高等女学校の校名は不可分のものとなつた。岡山県人ですら、山陽の創設者は上代淑と思ひこむまでになつたのである。



1905年落成の新校舎



漱先生と日曜学校の子どもたち

廃墟で開かれた最初の職員会議の冒頭の上代校長の言葉は「灰の中より立ち上がりましょ」。不屈の第一声であつた。

上代淑は、多くの女性が近代的な女学校教育を終えるとともに、ふたたび日本の因習的社會道德の範を示すべきだと諭し、また女性を世界に埋没していくことに着目し、はやくから卒業後のアフターケアの必要を痛感していた。それが同窓会の講演会などになつたが、他方では明治四年の山陽裁縫塾の開設となつた。岡山県人ですら、山陽の創設者は上代淑と思ひこむまでになつたのである。

社会と婦人

上代淑は、多くの女性が近代的な女学校教育を終えるとともに、ふたたび日本の因習的社會道德の範を示すべきだと諭し、また女性を世界に埋没していくことに着目し、はやくから卒業後のアフターケアの必要を痛感していた。それが同窓会の講演会などになつたが、他方では明治四年の山陽裁縫塾の開設となつた。岡山県人ですら、山陽の創設者は上代淑と思ひこむまでになつたのである。

主主義の先輩国民として日本に欠けている社會道德の範を示すべきだと諭し、また女性を尊敬し、祖國の母を悲しませることのないようになると結んだ。説教が終わると将校も兵士も壇にかけ寄つて握手をもとめ、中には故郷の母を思い出したと涙を浮かべて抱擁する者もあつたという。

「神どんとに愛されて……」と刻して、養嗣子であり、のち山陽学園短期大学長となつて故人の遺志を繼承発展させた生化学者・アラギ派歌人の上代暗三がその墓碑の碑文とした上代淑は、簡潔な銘文そのままに、キリスト者として、また山陽高等女学校長として、明治二二年以来、昭和三四八年八八歳をもつて昇天するまでの七〇年間を岡山の女子教育に貢献した。

上代淑は、いま山陽学園短期大学を見おろす岡山市平井篠山の墓地の簡素な石碑の下に眠っている。

『神どんとに愛されて』

その生涯を女子教育の為に捧ぐ』

墓碑銘の全文

（就業女子大学非常勤講師 富岡敬之）

ある日曜日、米軍兵舎内の教会に招かれて礼拝説教をおこなつた上代は、静かな語りかけで若い占領軍兵士の不行跡をたしなめ、民

一隅を照らす人になれ 独創教育の実践

ひ
檜

だか
高

けん
憲

そう
二

はじめに



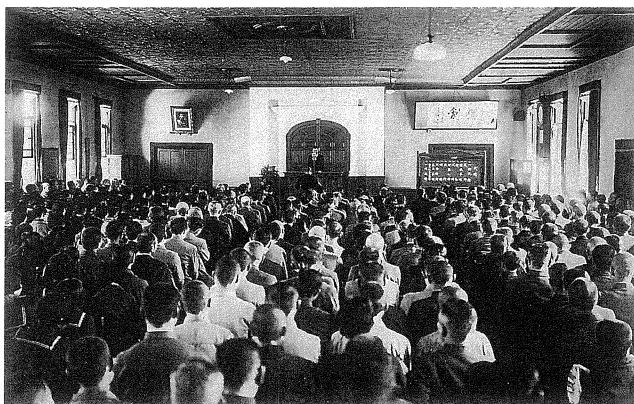
あらゆる教育諸活動を有機的に組織すること

もに、合理的な学校経営に専念した。

こうして、独自の「西条教育」をつくりあげていったのである。檜高校長の情熱と理念は、やがて全町の認めるところとなり、さらには、全国の教育界に影響を与えることになった。

彼は、昭和二年（一九四六）、戦時中の翼賛社団長の責で退職するまで、二三年の長きにわたって西条小学校長を勤めた。

校長退職後も、彼の始めた西条教育は、よき後継者、池田弘校長によつて受け継がれ、進展を続けた。毎年二日間の日程で開かれていた西条教育研究大会について当時の新聞は、「全国各地から二〇〇〇余名が参加」と報じている。檜高校長の信念は昭和三四年に西条小学校がほかの三校と統合するまでの三七年間どぎれることなく、受け継がれ、日本の教育実践史上に輝かしい足跡を残している。



西条教育研究大会

教育観と業績

当時、西条町では、諸問題の打開策を模索する中でその活路を教育に求めた。本氣で教育をやつてくれる人物として弱冠二十六歳の檜高青年に白羽の矢が立つたのである。まさに、教育人事の大英断であり、当然、教育界では大きな話題となつた。

西条町では、諸問題の打開策を模索する中でその活路を教育に求めた。本氣で教育をやつてくれる人物として弱冠二十六歳の檜高青年に白羽の矢が立つたのである。まさに、教育人事の大英断であり、当然、教育界では大きな話題となつた。

檜高憲三は、広島県賀茂郡西高屋村（現在は東広島市）の出身である。大正六年（一九一七）三月に広島県師範学校を卒業し、郷里の西条尋常高等小学校訓導として三か年間在職した後、特に選ばれて母校の附属小学校訓導に就任した。そこで、千葉命吉主事の独創的な教育理論の指導を受け、そして、大正二年（一九二三）四月、二十六歳の若さで、前任校である西条小学校長に抜擢され、千葉理論に基づく実践に力を尽した。

彼は、「人間が本来もつてゐる独創性を啓発助長することによる個性の完成をめざす西条には、千葉主事から教えられた「独創的な教育」を実施することが有効であると彼は考えた。

「救う」ことは、対立的・一面的な考え方をもつことなく、根本的統一を求めて、新しいものを生みだす独創精神を、学校を中心に、町に広めていくことであるとの認識に立つた。

彼は、酒の都、西条の教育的条件などの実態をもよく把握して、教育改革にのりだしたのである。彼の教育観と実践は次のようになります。

第一は、西条文化の向上である。
教育を学校教育という狭い範囲で考えず、広く社会教育を含めた教育文化圈を構想していた。よい子どもを育てるために、学校を核として大人も子どもも含めて、地域住民の間に、人間的な連帯感を深めることによって、学校を地域のものにすることができる考え方だ。そのため、各種の行事を計画し、組織化していく。学校と地域との共同体としての教育を推進することによって、町を救う人間を育成することができるというものであつた。こうした構想とその実践は、明らかに住民の民主的な意欲の創造を育てることになつた。しかしその構想を実現するためにはもちろん多くの困難もあつた。特に、彼が若すぎたため、封建的な町の風潮に、なかなかうち勝

て、理解されにくかつたということである。「今日もやられた」と口ぐせのように言つていたというエピソードもある。

ところが、彼の粘り強さで、種々の構想を漸次推進させていき、「この校長がよくなつた」といわれるようになつたのである。

第二には、千葉命吉に習つた理論の導入である。

すなわち千葉理論を具体化し、効果をあげることにあつた。千葉理論とは、教育に本質的に含まれている二律背反的問題を創造的統合によつて克服するというものであつた。彼は、千葉理論のうち、実践上から納得ができる効果があるであろうと予想されるものを積極的に取り入れようとした。

また檜高校長は、千葉から習得したこの理論を「独創教育要領」といわれる小さなパンフレットにまとめた。教頭の井上節夫と夜遅くまで、その要領の一文字をいかに解釈し、学校にどのように取り入れるか議論を重ねた

という。疲れていために水を入れた洗面器を置き、どちらかが洗面器の中の水をかけあうことにしたそうである。「檜高校長は、教育に命をかけていた」と、その当時を知る多くの職員の語り草となつてゐる。

やがて、彼は、千葉理論をうのみにするの

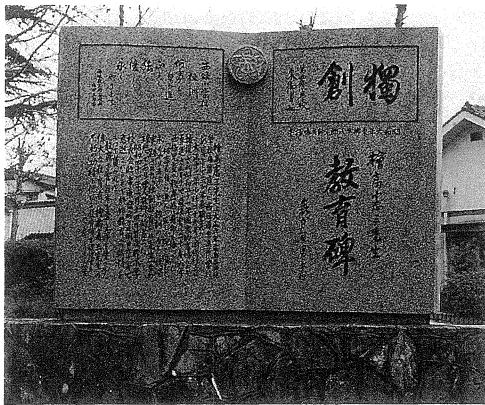
一隅を照らす教育をしなければならないと説き、子どもには、一隅を照らすような人間になるよう努力することを教え、そのような配慮を教育の隅々にまで徹底させようとした。もう一つの考え方とは、指導法に結びつけた解釈である。すなわち、教育内容の最も本質的な一隅に光を与えることによって、全体への類推を働かせるようにするということである。子どもたちが学習内容全体を直観的にとらえることのできるような最も本質的な發問をする必要性を説いている。

第四には、西条小学校を日本の教育のモデル校に育てることであった。

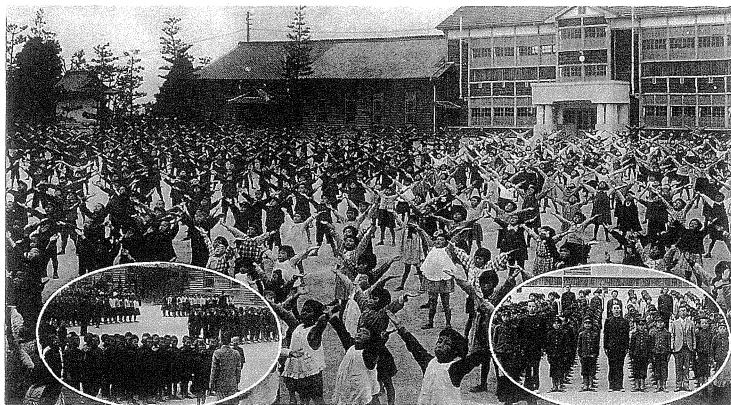
西条教育を単なる地域の教育としてのみ育てるのではなく、その教育努力によつて生みだされる教育理念とその技術を、広く全国に紹介し、日本の教育全体へ貢献することを意図していた。その意味では、彼は郷土を愛し、国を愛した人であった。

西条小学校を日本の教育のモデル校にするために、檜高校長を中心とした教職員の相互協力によりわけ力を入れた。平素よく読書をすすめ、教職員各人が読んだ本の中で、重要なところに線を引き、校長に渡す。校長も読んだところを教職員に紹介し、相互に考へる機会をつくつた。

また、教職員相互研修の場として、特別な



御建神社境内に建つ檜高憲三教育碑



西条教育学校朝会体操

それゆえ、教師には隅々にまで目を配り、

「独創塾」という建物を建設している。

他方、彼は、毎年六月、研究発表大会を開催し、常に研究成果を世に問うたのである。昭和三年（一九二八）六月一〇日に第一回研究発表会をしてから、戦中、戦後を通して、一回もどざれることなく、三〇回という長期間にわたつて、「貫して『独創教育』を研究し発表してきたことは、まさに驚異的な出来事であった。

檜高憲三は、校長を辞職後、視聴覚教育に尽力し、追放解除後は、県会議員一期、西条町教育委員長、県PTA連合会長、県私立各種学校連盟会長などを歴任した。

昭和四一年（一九六六）一月、賀茂郡小学校長会の研究会へ出席し、講演を終えて降壇した直後に倒れ、同日、西条町の教育の土台を築いたその生涯を終えた。時に六八歳であった。

この偉業を後生に残そうと、檜高憲三教育碑が西条町御建神社境内に建てられている。

（東広島市立西条小学校長 重光 守）

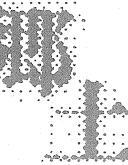
- 参考文献
- 扇田博元著『独創教育への改革』（第一書房）
- 檜高憲三著『西条教育の実際』（みかづき社）
- 檜高憲三著『西条教育』（第一出版）

ではなく、郷土や学校に適した、独創的な教育をうち立てなければならないことに気づきはじめる。千葉理論ではない西条独自の教育を推進していくことになる。まさに、模倣から創造へと大きく転換していくのである。

檜高が独自の実践的教育論を樹立できたのは、「郷土を救う教育を」という信念を、かたどきも忘れなかつたからであろう。また、この信念が、町民の協力を得ることにも資するところとなり、多くの人たちから歓迎されたゆえんであろう。

第三には、檜高憲三自身の人生観の具体的実践である。

彼は教育観の中心に「一隅を照らす人間を育てる」という信念をもちこの言葉を次のようにどうして、教育的意味をもたせていたようである。その一つは、人間には一人ひとり長所も短所もある。早く覚える人、遅い人もいる。しかし、何一つできない人はいない。なんでもよい、自分の能力を生かしながら、持ち場を持ち場で、明るく輝く存在に、世の隅に光を放つものになれという意味にとつていた。ひと言でいえば、なくてはならない人になれということである。これを檜高校長自身の人生観とともに、教育の信念にしておいた。



太古のロマンを求めて 化石調査に情熱を傾けた教育の実践者

岡 藤 五郎

業績の概要

昭和五五年一月、美祢市及び周辺から産出する化石を一堂に収め展示した美祢市歴史民俗資料館がオープンした。この資料館にある化石を収集し、化石の宝庫美祢を全国に広めたのが、化石調査に一生を捧げた高校教師岡藤五郎であつた。



名前を冠したものが数点に及ぶのもそのことを物語っている。

また、全国の大学・博物館の専門学者との交流を深め、一三の学会に加盟して論文を発表するなど斯界の期待にこたえた。また、大嶺高等学校に異例とも思える展示館を開設し、年間二〇〇〇人にも及ぶ見学者や採集者を迎えて、参観者にいつも温かく明るい笑顔に情熱をこめて対応し、広く“化石の先生”と尊敬を集めていた。

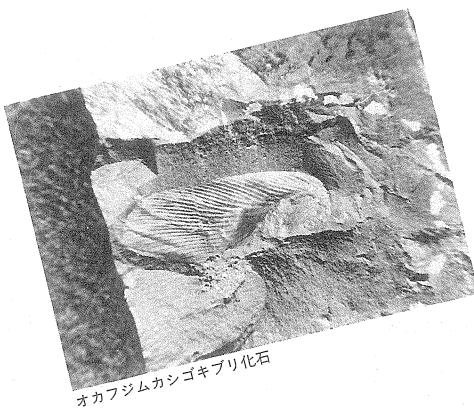
しかし、積年にわたる過労から心臓を病み、秘かに体力の限界を知りながら、調査研究を中断することなく続けていたが、昭和五三年七月の炎天下、化石採集の現場で倒れ、遂に五十三歳の生涯を終えた。

<略歴>

大正一三年	美祢市伊佐町に誕生
昭和二〇〇年	旧水原農林専門学校博物科卒業
同 年	山口県立豊浦中学校（現豊浦高等学校）教諭に採用
昭和二七年	山口県立大嶺高等学校創立と同時に着任

<受賞>

従五位勲五等瑞宝章、中国文化賞、山口放送賞、美祢市学術文化功労賞、日本生物会賞、日本学生科学賞（指導者）



化石研究者への道のり

吳服を商うしにせの長男として生まれた五郎少年は、元気に川で魚を追いかけ、野山を駆け歩き、のびのびと、自然を友として育つた。

素直に自然の中に溶けこみ、動植物を相手にものごとを考える少年であったことがその後の彼の生涯を決める大きな要因になつた。

終戦の年、県立豊浦中学校（現豊浦高等学校）に駆け出し教師として赴任、六年間勤めた。明朗で積極性のある彼は教壇だけの教師に満足することなく、生徒を連れて関門一帯の古生物（化石）の調査を始めた。

戦時中の要塞地帯で、立入禁止されていた地域への出入りが自由になつたことも幸運であった。

時には駅頭で警官にリュックサックを調べられ、中から石ころばかりが出てきたことから変わった人だと驚く警官に対し、当の彼は笑顔で相手の驚きを見つめるばかりであつた。化石先生の面目躍如たる話である。

当時、採集された化石はアンモナイト・貝類化石が主であつた。

昭和二七年、郷里の美祢市に待望の県立大嶺高等学校が新設されるや彼も望まれて着任した。周知のように美祢市一帯は、長門構造

帶を核として、日本列島形成にかかる古い地層群を有することから、彼の化石調査への夢は広がるばかりであった。

秋吉台カルスト地帯、大嶺炭田は化石のメツカであり、郷里でもあつたことから、住民との交流も多く「先生、こんなものが」と化石や骨片を学校や私宅にまで持ち込み、情報を伝える人は年を重ねて多くなった。

当時、秋吉台を米軍空爆演習地にとの要求があつたが、地元住民、学者、文化人一体となつての反対運動により結局沙汰やみとなつた。これを契機として、秋吉台周辺の学術的価値は高く評価され、同時に美祢市における石灰岩台地は、石灰・セメント産業による大規模開発が着手され、他方、大嶺炭田も増産体制が敷かれ、地下資源開発の活況は日に日に隆盛を極めた。このようになると学術的な調査・研究・採集は関係者の間で必然的に注目を浴び、彼のまわりは多忙を極めた。

彼のような第一線の「目」が重要な意義を持ち、彼と分類学専門の学者との交流は日々追つて深まっていき、彼は学界からも認められるようになるとともに、彼の研究も一層充実さを増した時代でもあつた。

人間の生き方を教える

彼は教師としても優れた教師であつた。上

〇近い洞穴があるが、當時、大半は人跡未踏のものだつた。彼は大嶺高OBを中心としたケーピンググループ「こうもり会」とともに金部の洞穴を探査した。洞窟調査の近代化を指導する一方、オオツノシカの化石やトラの骨等を発見し、この世界に大きなセンセーションを巻き起こした。

もう一つは、昭和四三年大嶺炭田の露天掘現場での植物化石群の発見であり、その収集は彼の生涯での一大快挙であつた。

企業側の入山に対する厳しい制約の中で、勤務を終えると連日採炭現場通りをした。陽が落ちて暗くなるまで採集し、邪魔にならない場所へ重い石塊を移動する作業を一人で行つた。

汗と力と情熱の結晶はトラック數台分となり、大嶺高等学校に運ばれて、見る人をびっくりさせた。これらの化石は整理された上、国立科学博物館をはじめ全国の大学、更には外国にまで分譲され多くの研究者から感謝された。

夢は太古のロマンを求めて

彼の調査活動で収集した人骨は洪積世のものか?と、東大の鈴木尚教授も注目し、調査もされた。結論は慎重を要することで断定的



岡藤五郎氏胸像



美祢市歴史民俗資料館

司や教職員仲間からも信頼が厚かつたが、なんといっても生徒から尊敬されていた。授業にも情熱的で、生物進化の話にでもなると生徒も時のたつのも忘れるほどであった。課外活動の生物クラブの指導業績にもめざましいものがあり、第一〇回日本学生科学賞はじめ、数々の受賞がその業績を物語っている。彼の董陶を受けた人々は、今それぞれの職にありながら、彼の遺志を継ぎ各地で化石調査、研究に精進している。集まるごとに必ずその話題は岡藤先生の情熱あふれる教師として、研究者としての話になる。それもひとえに彼の教室、野外、自宅を問わない研究者として、教師としての情熱あふれた人間味や、人との生きざまが教え子たちに伝わったからである。

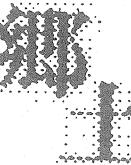
少ない時間を研究に没頭し、地方の一高校教諭というハンディを克服し、古生物各分野、地学、人類学、考古学等々の文献をひもどき研さんを深めた。「私は専門学者ではないが、化石を調べるために幅広い知識が必要だ」とし、さらに「研究を一人のものとしてはならない」と常に語っていた。

岡藤五郎の残した業績はこれまで紹介したように数多くあるが、その一つに洞窟探査がある。

秋吉台一帯には横穴、豊穴、複合穴など三十ヵ所以上あるが、彼は人骨の出た伊佐という地名をとつて「伊佐原人」と命名したいといふ気持ちを持つていたといふ。日本列島にいつから人が住んだか、この研究は学界最高の焦点である。彼はこの地方から大陸動物の骨が出ることは、きっと先住民の骨も出るはず……と、心ひそかに期待をかけ夢を求めていた。

「毎日が教育と研究で楽しい。植物化石、洞穴生物、プラナリア(扁形動物の一科)、ミジンコ、カタツムリ、哺乳動物と手を広げすぎているが、体力が続く限り調査したい」と、レポートに追記しているのも、昭和五三年七月二〇日の午後、突然襲つた心臓発作で倒れ、再び立つことはなかつた。美祢市にも、学界のためにも惜しんでも余りあるものがある。彼は生前から、発掘採集した一〇万点に及ぶ化石を、全国の研究者、見学者のために開放した。そしてそのための充実した化石博物館の設置を美祢市に念願していた。市も彼のその遺志を受け、現在、美祢市歴史民俗資料館として実を結び、岡藤五郎の生涯をかけた功績が納められている。

(山口県美祢市教育委員会教育長 岩野和夫)



徳島が生んだ世界的な人類学者・考古学者 鳥居龍蔵



た努力のたまものであった。

少年時代

鳥居は明治三年（一八七〇）に徳島市船場町（現同市船場町一丁目）で代々阿波藩の煙草の大間屋であった鳥居家（父新次郎、母トク）の次男として生まれた。鳥居少年は、物をきちんと整理する母のきちょうめんな性質を受け継ぎ、少年時代から収集品を完璧に整理整頓したという。これが後に研究資料を収集し、整理することで研究を行う人類学や考古学の分野で、世界的な業績を残すことになったと考えられる。

観音小学校（現徳島市新町小学校）に入学校生活にはなじめなかつた。しかし、教科書「小学読本卷一」の最初に掲載された世界の五人種に興味をもち、これが人類学に関心をもつ契機となつた。

小学校時代に富永幾太郎の感化を受け、人と自然との関係に関心をもち、その後、歴史、地理、博物などの書物を読み、古墳や石器などを探すことに興味を持つていつた。

鳥居は昭和のはじめ、ある新聞記者の取材に「私は少年時代から地理・歴史が好きで、好きなことばかり勉強していたため、小学校



白塔と鳥居博士夫妻（昭和5年慶州城跡にて）

坪井正五郎との出会いと東アジア調査

明治二九年（一八八六）、一六歳のとき東京に東京人類学会から派遣されて中国の遼東（リヤオトン）半島および東北部の調査を行つた。これが鳥居の海外調査の第一歩である。この調査は日本の人類学・考古学者によるアジア大陸研究の最初であり、二五歳の若い学徒がその第一歩を踏み出したのである。

明治二八年（一八九五）東京人類学会から大学理科大学人類学教室整理係となつて、本格的な人類学・考古学の勉強が始まったのである。

明治二九年（一八九六）から三三年（一九〇〇）までの間、鳥居は東大から派遣されて四回におよぶ台湾先住民族の体质・言語・民俗などの調査を行つた。この間、明治三二年

日本人類学・考古学の先駆者

平成元年度に日本全国で開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、約二万五〇〇〇件にもおよぶ。先史時代から中近世にわたり土地に刻まれた先人の生活の足跡が解明され、歴史上の新しい事実が次々と発見されている。

今日、ブームともいえる隆盛をみせる日本の人類学・考古学者も、明治・大正・昭和初期はその黎明期であった。そのような時代にあつて、斯学の基礎を築き、それを東アジア的視点から世界的な水準にまで発展させた人に鳥居龍藏がいる。

鳥居は人類学・考古学・民族学を独学で修め、今日では學問的方法として一般化しているフィールドワーク（野外調査）を最初に導入し、遺跡・遺物や生活用具を生活史の立場から実証的に研究した人である。

彼は明治三十年代から昭和一〇年代まで東アジア・内陸アジアからラテンアメリカおよび日本国内を精力的に調査し、今日いう「東アジア的視点」から考古学や古代史を開拓した先駆的実践者であった。

鳥居の名は世界的に有名になつたが、それは、少年時代にいた初一念を貫き通すべく絶えず新鮮な目標をかかげ、たゆまず続けることになつた。

やがて、人類学幹事であつた坪井正五郎との文通が始まり、その指導を受けて徳島市近郊の遺跡を調査している。

坪井の勧めもあり、明治二十五年（一八九二）家族とともに東京に移住し、翌年、東京帝国大学理科大学人類学教室整理係となつて、本格的な人類学・考古学の勉強が始まったのである。

明治二八年（一八九五）東京人類学会から派遣されて中国の遼東（リヤオトン）半島および東北部の調査を行つた。これが鳥居の海外調査の第一歩である。この調査は日本の人類学・考古学者によるアジア大陸研究の最初であり、二五歳の若い学徒がその第一歩を踏み出したのである。

明治二九年（一八九六）から三三年（一九〇〇）までの間、鳥居は東大から派遣されて四回におよぶ台湾先住民族の体质・言語・民俗などの調査を行つた。この間、明治三二年

(一八九九)に北千島に千島アイヌの調査を実施し、石器時代の日本人について、当時行われていたアイヌ説等の論争に影響を与えた。

明治三五年(一九〇二)台湾先住民族との比較のために中国南西部の苗族(ミヤオ族)の調査に東大から派遣され、今日みられるこの地方の少數民族の焼畑農耕文化に日本民俗文化の起源をみることを七〇年も前に取り上げ、注目したのは鳥居であった。

明治三九年(一九〇六)から四一年(一九〇八)にかけて、きみ子夫人と二人して東アジア全域にわたる調査に赴いた。鳥居の研究調査は、中国の中央部をのぞけば東部アジアの全域にわたり、大正一〇年(一九二一)にその成果により東大から文学博士の学位を受けている。

鳥居の海外調査で注目すべき点は、昭和三年(一九二八)、五年(一九三〇)には夫婦で、同八年(一九三三)、一〇年(一九三五)には次男・長女の一室四人で家族による調査を行つたことである。

きみ子夫人は、鳥居の個性や仕事のよき理解者であるとともに、学問上の協力者でもあつた。二人は明治三四年(一九〇一)に結婚している。彼女は学者の妻として生きぬいた女性であつた。東アジアにおける研究調査では助手を務め、一家は現地の服を着て、その地方の言葉を話し、その地方の生活にどけこ

とであつた。「第一次大戦後の大正デモクラシーの風潮にあづかつた」と鳥居は親しかつた笠井藍水(郷土史家・海部郡日和佐町出身)に述懐している。

大正一三年(一九二四)、東大助教授を辞職し、国学院大学教授となつた。さらに、昭和三年(一九二八)には上智大学の創立に尽力し、教授・文学部長として活躍した。

昭和一四年(一九三九)に中国北京の燕京大学から客員教授として招かれ、昭和二六年(一九五二)に退職して帰国するまで北京において研究が続けられた。

昭和二六年(一九五一)二月に中国から帰国し、同二八年(一九五三)一月一四日、東京において、この学問の開拓者として大きな業績を残し、その生涯をどじる。

八二歳であつた。

昭和四〇年(一九六五)に、徳島県は、鳥居の世界的な業績を顕彰するため、鳴門市妙見山公園山頂に徳島県立鳥居記念博物館を建設した。同館構内の小庭園には、博士が中国において最初に発見したドルメンをかたどつた支石墓がつくられ、きみ子夫人とともに静かに眠つている。

国内調査

んで調査を行つた。

明治二〇から三〇年代には東京近郊や岐阜、近畿地方、南西諸島の調査をしている。鳥居は大正五年(一九一六)に武藏野会を創設し、機関誌「武藏野」を発行し、武藏野の文化史研究の指導的役割を果たしている。

賀郡木頭地方の民俗調査をはじめ、大正一年(一九二二)には、徳島市城山の貝塚を見し、徳島の先史時代の姿に学問の光をあてた。



A 遺の皇帝陵(秦陵)に副葬されていた木偶

教職時代

鳥居は明治三一年(一八九八)に東大助手に任せられている。大正二年(一九一三)恩師の坪井正五郎博士が外国で客死した後に、博士の後を受けて講師として考古学・人類学を講義した。

理学部教授会は彼を講師待遇のまま人類学教室主任にし、大正一〇年(一九二二)学位を受けたことにより、翌年、助教授となり、教授同様に講座を担当。教授会にも出席する権利を与えられた。講師生活が長かつたことはいえ、当時小学校中退の「博士」は異例のことである。

安教授は、「フィールドワークを重視し、幅広い視点から考察する博士の研究姿勢に強くひかれた。また私の中国考古学者としての基礎を固めてくれた。鳥居先生は私が中国で初めて会った日本の考古学者で、常に優しく、丁寧に教える人であつた。研究も奥が深く幅広かつた。今の若い人たちには偉大な博士の業績はあまり知られていないが、大いに紹介する必要がある。日本を訪れるのは六回目であるが、ようやく念願の墓参りができる非常にうれしい」と記者団に語つている。

【参考文献】

鳥居博士顕彰会(事務局長鳥居龍次郎)

『國説鳥居龍伝』

朝日新聞社『鳥居龍蔵全集一二巻、別

卷一』

朝日選書、鳥居龍蔵著『中國の少數民族

地帶をゆく』

(鳴門市立鳴門中学校教諭 岩村富夫)

郷士

有終の美ならざるは 九仞にして一簾を虧く

大久保彦三郎



盡誠舎職員と卒業生（明治33年）

彼は県当局はもとより、広く農民に対しても文化、特に教育立県の重要性を訴え、また

郷土の産業開発、経済の振興にも兄謹之丞の

素志を継いで大いに奔走した。また一般県民

に対しても仁愛と思いやりの温情をもつて接

し、特に地元住民の厚い信望を得ていたこと

が、当時の新聞その他で知ることができる。

さらに、その私生活をかいま見ても、両親への孝養、兄弟愛、師弟愛等、彼の温厚篤実な人柄は、終生を通じ接する人を感化した。

彼の経歴については、明治三二年、時の文部大臣樺山資紀あてに書かれた、自筆の履歴書をもとに、その足跡をたどってみたい。

修学時代

1 初学、香川甚平に漢学を学ぶ

履歴書によると、明治の初め一〇歳のころから那河郡十郷村（現・仲多度郡仲南町十郷）

香川甚平に従い漢学を修めた。

2 一六歳にして小学校教員となる

香川甚平に従い修学すると同時に三野郡財田上ノ村小学校に学ぶ。明治九年三月卒業。

小卒直後同校の三等授業（現・助教諭程度）として教職に就く。

3 黒木茂矩に学ぶ

半年の教員生活の後、当時高松の地に開塾して名を成した黒木塾の門を叩いて漢学と国

私學は一私人の創意と理想に基づいて創設される。したがつて、まず独特の精神があるに塾と呼ばれ舍と呼ばれる学校が創られる。人材の育成について、独自な識見と高邁な理想を抱く人材が私財を投じ、情熱を傾けてこれを創設し、これと共に鳴する有縁の精神的、物質的奉仕と協力を資源として、漸次に充実发展するというのが私學の自然な姿であろう。

学校法人・盡誠学園のルーツは、大久保彦三郎が明治一七年三月一日、愛媛県讃岐国三野郡財田上ノ村（現・香川県三豊郡財田町）に私塾「忠誠塾」を開設したところに始まる。大久保彦三郎は、今を去ること一三三年前安政六年、讃岐国三野郡財田上ノ村の農家に父森治、母ソノの五男として生まれた。

三兄謹之丞は四国最初の鉄道開発（明治二年、讃岐鉄道）に関与し、その開通式の演説に早くも本四連絡橋（瀬戸大橋）建設の必要性を唱え、かつまた高知及び徳島県との交通の重要性に着目して、私財を投じて讃岐新道の建設を実現するなどの四国開発の諸事業の端緒を拓き、四国開発一〇〇年の将来を予測する偉大な先覚者であった。この人を実兄にもつ彦三郎は彼の使命とする教育事業はもちろんのこと、兄謹之丞に劣らず県政においても私欲を離れた姿で常に心を燃やしていた。

この中で彼のことを「殊ニ御性質沈着誠実堅中御取締異レ窓友ノ規範トモ御成被下難有仕合ニ御座候」と激賞している。

4 成翼館に学ぶ

兼ねて、高松中学校（現在の高松高校の前身と別）にも入学し、普通科を修業したところが、明治一〇〇年五月、仁尾村（現・三豊郡仁尾町）の桑門觀照の私塾成翼館に学ぶ。彼はここに一年余学びながらも徐々に京都、大阪に出で切磋琢磨したといふ事が押さえ切れなくなり、明治一一年八月「聊サカ素懐ヲ述ブ」と題する置手紙を残して郷里を出奔し、遊学の途につくことになる。

5 京都遊学

京都遊学の目的は三国幽眠に学ぶことであつた。また、郷里出身の松岡彦二の私塾について交友を深める。この幽眠、彦二とは退塾後も師弟のつながりを持ち続け助言を受けている。

6 三島中洲に学ぶ

明治一二年六月、京都を後にして上京、二松学舎にて生涯の師となる三島中洲に漢学を学ぶ。

彼が就いて学んだ香川甚平、黒木茂矩、桑門觀照の三師は常に山田方谷の徳業を称えて

いた。方谷は漢学の才により備中松山藩の藩校の会頭學頭を務め、幕末には藩元締になり藩財政の危機を救い、陽明學を実地に生かしたことで名声を天下に馳せた人物である。しかし、このとき既に方谷は亡く、この二松学舎で方谷の学統を繼ぐ三島中洲と彦三郎との奇しき巡り会いとなる。

二松学舎は明治一〇年、東京麹町の三島中洲の自邸内に開設された。その教育目標は、当時の世人が西洋文明に心酔し、洋風にあこがれて浅薄な生活態度に流れているのを批判し、専ら東洋古来の道徳に主眼をおき、実学の士を養成することにあつた。二松学舎百年史によれば、学友安田繁四郎の回顧録の一節に、彦三郎の活躍ぶりが次のように記録されている。

私塾経営

1 有終学会・三餘舎

明治一六年の新年を故郷で迎えた彦三郎は、
（建家も余々に回復に翁家も、私塾を開設し、勧
され帰郷することとなるが、この二松学舎においての師中洲と弟子彦三郎の心つながりは、彼の生涯を貫いて絶えることはなかつた。



盡誠舎男子生徒正服

2 忠誠塾

明治一七年三月一日、彦三郎は忠誠學園の組織的ルートである忠誠塾を開設した。この開設に当たつては、これまでの勉学や私塾の経験・思想が生かされていることはもちろんである。設立目的は、その「趣旨」による。國家有用の青年を作ることであり、その青年を作るための手段は儒教の漢籍学習を通じての忠誠心涵養にあつた。

その学課は、

第五等 二課 四書素読 日本立志編

第四等 三課 国史略 十八史略

（県）日本文史 元明史略

明治二九年 彦三郎提案の県教育委員会設立
県会議員に選出

三二年 舎を現在地の善通寺町に移転

三四四年 師範部増設

県内における大久保彦三郎の徳望もいよいよ高まり、盡誠舎の基礎もようやく固まつた。明治四十一年、再び病を得て四十九歳で病没した。死に至るまで燃えるような教育への抱負を抱いていたことは、その年の年始に知人に示した次の七言絶句によく表れている。

学舎経綸廿四年 半斯病軀半要全
唯思達志果何歲 元氣未消心益堅

学舎経綸する事二四年
半ば此れ病体、半ば健康

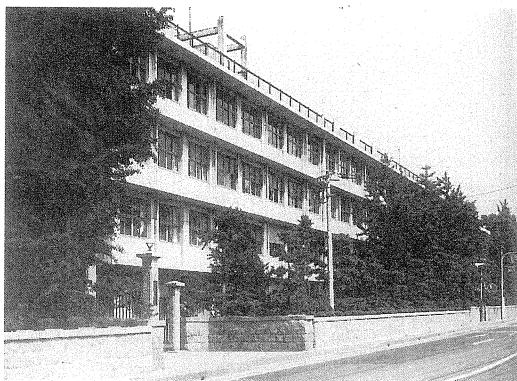
まだ思志を遂ずること
ただ思志を遂ずること

果たして何時のことか

元氣いまだ消えず、希望ますます堅し

盡誠舎の經營は、大久保直広新校主に引き継がれ、明治四年新校舎増築、翌四年諸準備を整え、四三年三月文部大臣から私立盡誠中学校の設置認可、その四月一日をもつて中学校令による尽誠中学校（定員三百〇〇名）が誕生した。開校式はこの月の二十四日に県知事初め数百名の来賓が参列して挙行された。

（善通寺市教育委員会教育長 滕田英樹）



現在の正門

- 1 有終学会・三餘舎
 - 2 忠誠塾
 - 3 京都に盡誠舎を開設
 - 4 郷里に盡誠舎を移す
- 明治二七年 盡誠舎を琴平東四條村（現・仲

業、教育、衛生の公益を計る目的で有終学会・三餘舎を設立する。その名前のいわれば「凡そ物に初め有りて終りなく、有終の美成らざるは猶ほ九仞にして一簞を虧くがごとし」と勉学の継続成就にあつた。

有終学会・三餘舎を作り、社会教化のための第一步を印した彦三郎は、農村青年のために夜学校を作ることとした。三餘舎は、勉学に利用すべき三つの余暇（冬・夜・雨降り）立て明治一六年八月であつた。教則によると、勉学の継続成就にあつた。

有終学会・三餘舎を作り、社会教化のための第一步を印した彦三郎は、農村青年のため夜学校を作ることとした。三餘舎は、勉学に利用すべき三つの余暇（冬・夜・雨降り）立て明治一六年八月であつた。教則によると、勉学の継続成就にあつた。

「誠実眞面目以て万事を……」 師範学校の師父

山路一遊



山路一遊

二 波乱の修学時代



「師道鑑仰之碑」(愛媛大学教育学部構内)

山路一遊は、安政五年（一八五八年）一〇月、松山藩の上士山路一審（藩主側役勘定奉行）の長男として、松山城下南堀端町で生まれた。七歳にして藩校明教館に入り、五年間漢学を修業した。維新の学制改革で明教館内に洋典科が設けられると、一三歳の最年少ながら選抜されてここに入り、慶應義塾から招へいされた船垣銀治・秋山恒太郎らから英語・洋算を習つた。この洋典科は廢藩置県によりわずか二年で廃校となり、一遊は、勝山小学校の教師、ついで大阪に出て小学校教師となり家計を助けるが、勉学の急止まず大阪英語学校に入学した。同校で、イギリス人教師について英語・数学を学び、学業優秀につき飛び級で進級したが、禄を失つた山路家の窮迫で学資が続かず中退して帰郷しなければならなかつた。向學の念斷ちがたくもんもんの日々を過ごしているうちに、明治一〇年二〇歳のとき、県立北予変則中学校（のち松山中学校）の司教に招かれた。

この学校は、「民權知事」として知られる愛媛県権令岩村高俊が慶應義塾から草間時福を招いて明治八年に創設した県立英学所が前身で、翌九年に中学校に発展した。草間校長は

昭和一二年一一月、愛媛県師範学校に学び愛媛教育を推進する同窓生が、母校の玄関前に山路一遊の教えを刻んだ記念碑を建てた。この碑は、山路を人生の師と仰ぐ愛媛県地方視学官林伝次（のち愛媛県師範学校長）が撰文し、「師道鑑仰之碑」と名付けられた。それは、次のような文章でつづられていた。

『人ノ師タル者ハ獨ク嚴毅ニシテ寛仁達識ニシテ清高ナルヘシ 毫モ鄙吝苟劣（卑劣）ノ心志アルヘカラス 然シテ子弟ヲ教フルニ性ニ隨ヒ材ニ応シテ各其德器ヲ成就セシメンコトヲ要ス 是先師山路一遊先生力躬ヲ以テ垂訓シ給ヘルトコロ我等先師ヲ鑑仰スル者宣シク斯道ヲ繼紹シテ教學の興隆ニ努メサルヘカラス 茲ニ勒シテ以テ人ノ師タル者ノ戒トナス』

この碑は、戦後、愛媛大学教育学部構内に移された。また昭和四八年二月、愛媛県教育会が文教館（松山市道後）建設に際し玄閑前にこの「師道鑑仰之碑」を複写建立した。

山路一遊の教えは、今日でも、愛媛教育を担う教師の指針とされている。

三 文部省出仕、各県師範学校長歴任

東京師範学校卒業後文部省に出仕した一遊は、各府県の小学校教則の調査に当たり、各县に出張して教授法を指導した。明治一九年

一 師道鑑仰の碑

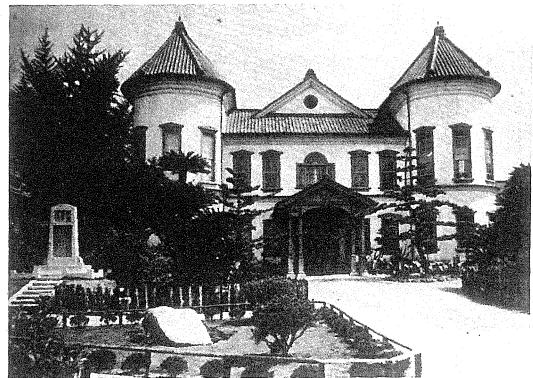
には高知師範学校長を兼任して七年ぶりに松山にも立ち寄り、故郷に錦を飾つた。同年、初代文部大臣森有礼による教育改革が始まる。一遊は文部省に呼び戻されてこれに取り組んだ。同二二年、三三歳のとき、同郷、文部省の先輩として頼つていた内藤素行（俳人号鳴雪）の長女順と結婚した。この年、愛媛県から分離したばかりの香川県の学務課長・尋常師範学校長を拝命して同校の建設に当たり、「教育者は紳士でなければならぬから、諸君を紳士として待遇する」として自治的な校風を樹立した。同二三年には、江木千之参考官（明治・大正期の教育改革を推進）のち文部大臣の下で、小学校令の改正に従事した。

以後、一遊は、明治二五年兵庫県尋常師範学校長、同三一年愛知県尋常師範学校長、同三二年埼玉県視学官、同三三年福島県視学官を歴任した。同三四四年には『読書法』を著述出版して、「修業の道は勉学に在り、勉学の道は読書法の宜しきを得るに在り」として、自らの修学時代洋書・漢書をむさぼり読んだ体験にかんがみ、青少年に読書をすすめ、その効能を説いた。

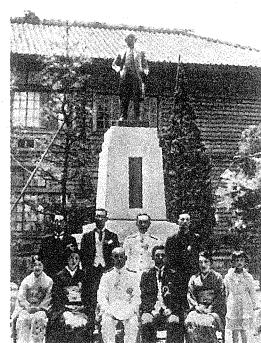
明治三五年、一遊は滋賀県師範学校長に就任した。折から同校は校舎を新築したばかりで校舎の周囲には樹木がなかつた。一遊は、小さな黒松の苗木を生徒の勤労作業で校庭・周囲の至る所に植えた。「もつと立派に生長したつた。

卒業していく者には、「小学校教育は人の爲にし國の爲にするもの」であるから、「誠実眞面目以て万事を一貫すべし」、公明正大にして明暗表裏あるべからず、周到にして粗略なるべからず、敏捷にして無精なるべからず」と教師の心得を諭した。

一遊は、附属小学校にもよく足を運び、生徒の教育実習の様子を見回つたが、この市内の附属小学校だけでは県下の農・山・漁村の数多い学校の教育のモデルにはなりにくい、もつと地方と結びついた小学校を代用の附属校にしたいと考えた。そこで、大正九年、模範村として全国に知られた温泉郡余土村の小学校を代用附属小学校に指定、農業を中心とした勤労教育を行い、自治活動や公民教育・郷土教育にも力を注いだ。



愛媛県師範学校（「師道鎮仰之碑」建立のころ）



山路一遊の銅像と遺族（滋賀県師範学校構内）

た色々な庭木を植えれば手間がかからないのに」と生徒たちは思った。ところが、松苗は年とともに成長して見事な美観をなす庭園を形成した。「一個の松の種子、境地によりて矮松ともなれば棟梁の材となる、人は教師が栽培すれば自ら境遇を選びて発展する」の教えを生徒に体得させる、百年の大計を考えての山路式の植林があつた。

一遊はここで一〇年間校長として在職した。その豪放な人格と高潔な教育理念は教え子にひどく敬慕された。一遊没後、滋賀県師範学校同窓会は、同校々庭に銅像（昭和九年建立）を建て、『恩師山路一遊先生』（同一六年刊）を出版して、その遺徳を追憶した。

四 愛媛県師範学校長として

大正二年、山路一遊は望まれて愛媛県師範学校長として郷里松山に帰つた。一遊すでに五六歳であったが、背骨を伸ばして闊歩する威儀に満ちた風貌は滋賀時代と変わらなかつた。新任式での一遊の第一声は、「学校はすべて生徒のものなり。教師も其の他すべて生徒あつてのものなり。諸君は堂々と闊歩せよ……」というのであつた。新校長の呼びかけに感動した生徒の一人は、食堂前の掲示黒板

一遊は、大正時代を風靡したデモクラシーの思潮には「浮説に迷ふ勿れ」と批判的であった。しかし、大正デモクラシーの影響で教育界に勃興した自由教育運動には、大正一〇年第一回愛媛教育研究大会での開会の辞に、「自由教育は或る点に於ては欠点もあるが、此の際教師が大いに働いて、方法の如何によつては偉大なる効果を修め得らるものであるといふことを世に知らせ度いものである」と述べるなど、理解を示した。

一遊は、生徒や同窓生から「師父」と仰がれたが、自己の教育方針に妥協を許さない硬骨ぶりを非難する者もおり、大正一一年一二月県会で辞職を求める声があがつた。師範学校の教師・卒業生・生徒たちは集会を開いて「吾々、山路一遊校長を絶対に信任するものなり」との決議文を発表した。この強い擁護運動に山路更迭の声は鎮静したが、翌大正二年、一遊は「老齢劇務に堪へず」と六六歳をもつて愛媛県師範学校長を勇退した。以後、一遊は、「断じて学校の姑たらず」と宣言して教育に口出しせず、花と野菜を無二の友として「無何有の郷（無為の仙境）」の晩年を過ごし、昭和七年八月、七五歳で生涯を終えた。

自由と独創の人 生活綴方の始祖

小砂丘忠義



生活綴方の始祖と仰がれ、日本の民間教育史上に不滅の業績を残した小砂丘忠義の顕彰碑が、昭和二八年一月に高知市城山の墓地に建立された。

一八九七年四月二十五日大杉村に生れ初め

教育界に在り自由教育と鼓吹し後上京し

「綴方教育に献身」一九三七年十月十日

東京に於て生涯を終る。君は尊高す独創

の人であつた。よだ独創の人であつた

前に偉大にして完全なる自由人であつた。

「生活綴方」は自由と独創の両親から生

れた。だから最高の価値と永遠の生命が

ある。君の魂は今もに續く者を励ます

まず綴方から

限りなく発展していく。

一九五三年一月

池田邦夫撰書

小砂丘（本名・篠岡）忠義は、明治三十一年四月、高知県長岡郡東本山村（現大豊町）で生まれた。

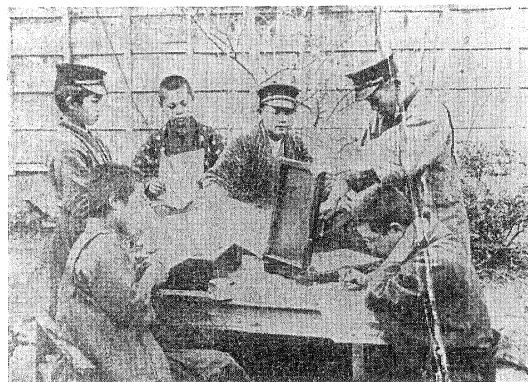
父（楠藏）は森林を切り倒し、苗木を植える植林人夫であつた。住居を軒々とし、父も母（芳）も身を粉にして働いた。長男の彼は木の実や山菜を採つては、おかずを作り、弟妹に食べさせた。

明治四五年、本山小学校高等科三年へ入学し、往復二四里の道を寒風にさらされ、ちょうちんをつけて通学したという。

このように幼いころから貧困に耐え、生きる力を身体を通して学び、反骨と強じんな人間性を培つていった。

木を切り倒すと匂つてくる木の香りが好きで、木こりになろうかと思つたが成績がずば抜けでよかつたので、教師の強い勧めで高知師範学校を受験した。

大正二年、師範学校へ入学したが、師範学校における教育にはなじめなかつた。後年彼の生涯の仕事となる綴方—作文—の授業よりは、むしろルソー、ニイチエ、独歩、藤村などを読み、自分自身の道を切り開いていった。



文集「山の唄」の作成風景 1919年(大杉校)右端手前が小砂丘忠義

大正六年、師範学校を卒業して、大杉尋常高等小学校へ赴任した。

綴方は学校の中ばかりでやつていられるものではない。綴方については、まずその人の人の生活している一個体としての自覚が緊要である。修身も歴史も理科もすべて綴方までの道程にすぎない。まず綴方から」と彼は主張している。

綴方によつてヒューマニズムの教育を全面的に試みた。最初の文集は「山の唄」であった。その後大正一〇年に同人誌として、中島菊夫（後、代表作に漫画「日の丸旗の助」）、吉良信之（後、「ダブルトンプランの進歩とその適用」を翻訳出版）と一緒になつて「極北」を発刊した。

「我々は生徒のために生きている。彼等の生涯を通じて我々の責任は大きい。古来のしきたりを放り出して、新しき自己の意識に生きることだ。道をふさぐ者をまたいで通るか、退いてもらうか、つきぬけて通るか、一緒にへばり込んでしまうかは自由である。ならうことなら人々と一緒に前へ進んでほしい」と述べている。教育革命論、視学論などを書き、当時の教育の在り方を批判した。この新しい考え方を中心に共鳴する者は極めて少なく、

多くの教師は敬遠するばかりであった。しかし、彼は終始、子どもを愛し、生活のなかから生まれてくる綴方に感動して評を書きつづけた。

あるとき、徹夜して文集を作ったので、数分遅刻したことがあった。このとき校長が出勤簿へ遅刻の判を押したのに對して、「僕は子どもの教育のために、文集作りを徹夜でやり、そのためやむを得ず遅刻したのである」と自分なりの正当性を強く主張して訂正を求めたという話も伝わっている。

大正一三年に「極北」が廃刊させられると、その翌年には「地軸」を発刊した。彼の同人誌や自由解放的な教育方法は、その当時の教育行政に携わる者からうどんじられた。

その後、長岡郡田井小学校長に任せられたが、彼は、ここでも子どもをみつめる教育に専念した。それまで廊下の壁に掛けてあつた楠公父子の別れや新田義貞の絵などを子どもに掛けかえてしまつたという。当時の体制の下で自分の所信を貫くことは、よほどの信念と氣骨がなければできないことであつた。

大正一四年一月、田井小学校長を最後として、相いれぬ教員生活に終止符をうち、万感の思いで上京する。土佐の教育に身を賄けてきた彼の心中はいかばかりであつたろう。彼の高知県下での教員生活は八年八ヶ月であり、その間に勤務校を七つも変わつていて。

は數えきれないほどであつた。それは、昭和一二年彼が死ぬまでつづいた。

彼は、日本における昭和初期以降の民間教育運動に大きな礎石を築いた。一生、綴方を愛し、教育文化運動に投身したのも、心底から子どもを愛した命がけの情熱があつたからである。

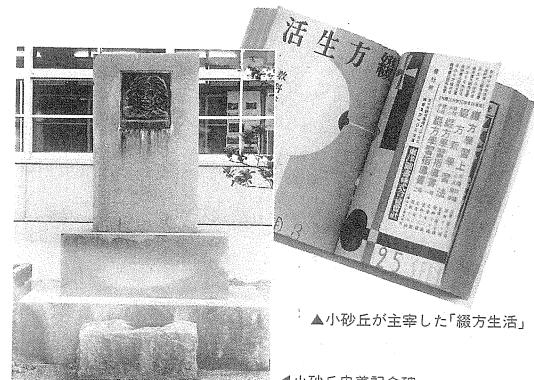
ああ　ふるさとよ

昭和六年八月、彼は七年ぶりに綴方の講習で土佐の土を踏んだ。甲板から見る浦戸湾の朝の光はまぶしかつた。母、妹、叔父が両手を大きく振つているのが見えた。木も草もいきいきとし、起伏する山並みに安らぎと懐旧の情が湧き、言葉も出なかつた。梁山俱樂部の仲間に囲まれて、酒をのみ、土佐の箸撃をうち、よさこい節を歌つた。

しかし、彼は肝硬変並びに腎不全のため、昭和一二年一〇月一〇日、東京において四歳の若さでその生涯を終えた。同じ高知の先輩である上田庄三郎は、「彼は綴方さえ読んでおれば夜の明けるのも日の出るのも知らなかつた。どんな文士よりもはるかに芸術的な境地であつたにちがいない。彼は独特の小砂丘精神を開拓した」と語つてゐる。



現在の大杉小学校



▲小砂丘が主宰した「綴方生活」

▲小砂丘忠義記念碑

「綴方生活」の発刊

上京後は東京児童の村小学校へ落ちついた。

この学校は自由を標ぼうしていた。彼は教壇には立たず「教育の世紀」の編集に当たつた。つづいて文園社で「鑑賞文選」(後の綴方読本)の編集をし、昭和四年に野村芳兵衛、上田庄三郎、峯地光重、小林かねよ等と念願の「綴方生活」を発刊した。

「綴方生活」は綴方教育の現状にあきたらずして生まれた。綴方教育の一分野のみではない。現状教育の分野に於て満たされた。つづいて文園社で「鑑賞文選」(後の綴方読本)の編集をし、昭和四年に野村芳兵衛、上田庄三郎、峯地光重、小林かねよ等と念願の「綴方生活」を発刊した。

それまでのものを見出すが故に、微力を顧みず敢えて出版する。「綴方生活」は新興の精神に基き常に清新潔斬たる理性と情熱とを以て斯界の革新を図る(創刊号)。

それまであつた「赤い鳥」の文芸的な綴方をのりこえ、生活に密着した子どもたちの姿を大切にしたもので、既成文化の伝達を中心とする教育に対して、現実の町や村にくらす子ども自身が生み出す野生の文化の創造を重視した。つまり、生活の事実を大切にした教育方法であった。

「綴方生活」を中心とする生活教育運動は燎原の火のごとく広がつた。九州から北海道までの教師たちの熱い共感をよび、その賛同者がつまり、生活の事実を大切にした教育

二つの記念碑が建つ

昭和二七年、小砂丘忠義の偉業を伝承し発展させるため、福田義郎(当時高知新聞社長)、横川正郎(当時宇佐小学校長)らを中心にして、小砂丘賞委員会を組織した。翌年から、作文

教育の実践に励んだ個人と団体に小砂丘賞を贈つており、平成三年で三九回を迎える。

また、昭和三十年に「こども小砂丘賞」を設け、現在に至つてゐる。更に高知市民図書館の協力で「小砂丘賞作品集」を発行し、高知県下の作文教育に大きく寄与している。

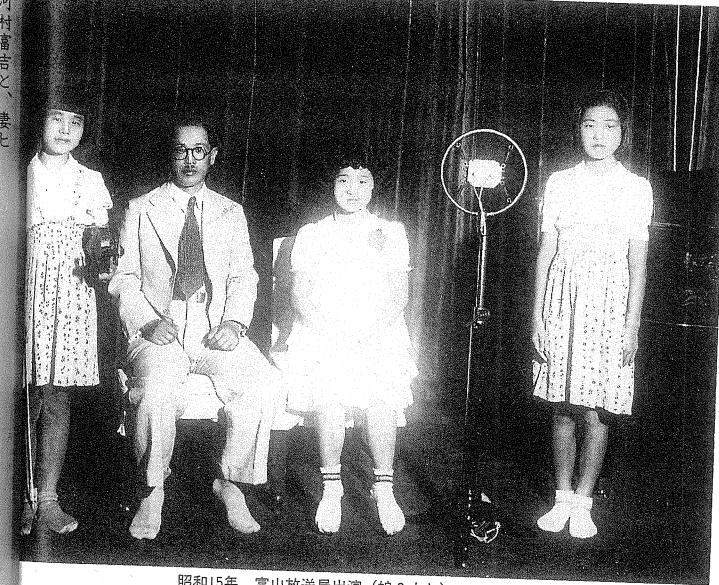
また、出身地の大豊町では本年度予算を組み、小砂丘忠義先生顕彰会を発足させ、小砂丘忠義記念館の完成を急いでいる(記念碑は昭和二八年に大豊町にも建立されている)。

先覚者たるがゆえに、ふるさとに受け入れられなかつた彼の記念碑がそのふるさとに二つも建つてゐることに深い感慨を覚える。やはり彼は偉大な先覺者であつた。彼が教育界にまいた一粒の麦は多くの仲間にささえられ、全国のすみすみで成長している。軍國主義の胎動する時代にあって、底知れぬ洞察力と不屈の精神で、画一的な教育に敢然として向かい、子どもどもに生きぬいた彼の業績は不滅である。

【参考資料】『生活綴方の伝統』『生活綴方事典』

(財團法人 小砂丘賞委員会常務理事 毛利俊男)

あかりをつけましょぼんぼりに 童謡一路 作曲家 河 村 光 陽



昭和15年 富山放送局出演（娘3人と）

おはなをあげまーじもんのはな

かしめの水兵さん ならんば、水兵さん
白い帽子白いシャツ白い靴
波にチャブチャブ浮かんでる

「かもめの
なかよし、みちはやこのみち

「ハンドセルーハー元氣、

れでもいつでもつい口ずさんでしまうこの童謡は、昭和の初めから、戦後にかけ

多くの童謡を作曲した河村光陽の作品です。彼の童謡の代表作にはほかに「赤い帽子白い帽子」「グッドバイ」「船頭さん」「りんごのひとりごと」「早起き時計」などがあります。

336

母の勧めもあつて小倉師範学校に進学しましたが、必ずしも彼の意を満足させるものではなかつたようです。師範学校での彼の不満を紛らわしてくれたものは音楽だつたのです。家の隣が神社で、お神樂の音を子守歌がわりに聞いていた彼は、生まれつきの器用さで、幼いころから好んで尺八を吹いていたこともあって、オルガン、バイオリンを得意とし、時には先生の代行も務めたということです。

に赴任しました。彼の勤務ぶりは、先輩、同僚も等しく認めるところだったので、彼自身は人知れず悩んでいたのでした。つまり将来の生活の安定を考えて師範学校を選び、小学校に就職したものの、音楽家としての道を歩みたいという願望はこのままでは果たさそうもなかつたからです。



大正10年 ヴァイオリンを持って

東京音楽学校へ

母の願いで四年ぶりに故郷に帰った光陽は遠縁に当たる岡部都根美と見合いし結婚しました。そして、新婚二か月目の大正一四年、向学心に燃える光陽は、東京音樂学校選科ピアノ科に入学しました。以来在学中の二年間、中田章等の有名な音樂家に個人指導を受け本格的な音樂の基礎の修得に努めたのでした。

長女順子が生まれて三ヶ月後に佐藤義美の

勧めで初めて「うれしさ」に附曲しました。

順子は後に声楽家として名を成し、父光陽の作曲した幾多の童謡をレコードに吹き込んでいます。人の子の親として、子どもの誕生ほど喜ばしいものはありませんが、彼は師範学校卒業という経験も併せて、童謡への関心を高めていたのです。

努力の人

芸術家にとって、天性の素質が大切なのは言うまでもありませんが、それと同時にたゆまない努力と精進なしにはその道で大成することは不可能といえます。彼の没後家族の手元には、数十冊のスクラップ・ブックが残されました。そこには当時の新聞からの切り抜き、世界の音楽情報、彼の関係していた催しもののプログラム、指揮をした往年の放送番組表などが充実に整理されています。これらのスクラップ・ブックは、彼が努力の人であったことを証明する同時に、当時の児童音楽を中心とした我が国の児童文化の推移の一面をうかがうことでのきる得がたい資料となつていています。

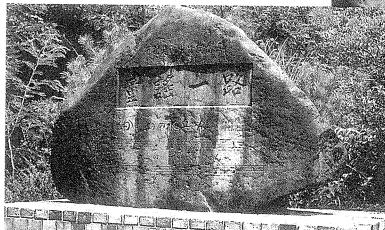
昭和三年一月、明治大学童謡研究会主催の「童謡と童話・踊りの会」に彼自身の率いるクロイツ少女合唱会（後の子鶴会）とともに昭和五年九月二八日 N.H.K.放送初出演「子ども時間」に作曲 指導 ピアノ伴奏で出演
昭和六年五月二十四日 「ホッポの会」（日本童謡社主催）童謡、小曲等の作曲並びにピアノ伴奏
昭和七年一月二一日 「朝日子どもの会」出演
昭和八年三月三日 「童謡作曲の仕方」出版
昭和八年九月九日 「河村直則童謡曲集」出版
昭和八年九月 「かもめの水兵さん」作曲着手
昭和九年一月三日 皇太子御誕生日祝言葉会 出演
昭和一〇年五月 「河村童謡第二曲集」出版
昭和一〇年一月一七日 「アンデルセン童話百年祭」出演
昭和一年二月 「うれしいひなまつり」発売
昭和一年 「子供のためのオルガン教本」出版
昭和一年七月三一日 小石川区立竹早小学校を依頼退職
直則を光陽と改名する
昭和二年九月 「まんまるお月さん」発売
昭和二年五月 「かもめの水兵さん」発売
昭和二年八月 「河村童謡第三曲集」出版
以来、昭和一七年までに一二集まで出版され、童謡作曲家、河村光陽の名は、日本中に広く知れ渡ることとなつたのでした。

童謡一路

太平洋戦争が終わつて、すさんだ人々の心



昭和3年 ピアノの前で



昭和四年三月、第三子の誕生を迎えようとしていた彼は、将来の生活設計も考え、五年ぶりに教職に就くことにしました。新設されたばかりの小石川区立竹早小学校の教壇に立った彼は、いよいよ児童への愛情が深まっていました。当時の子供たちの歌が、歌詞も曲も西洋風であるのを心配し、日本の子供たちにふさわしい、良い歌を与えるべく、そのころ望が一層強くなつていったのです。そのころの光陽は、教鞭を取る傍ら寸暇を惜しんでピアノに向かい、一日五、六時間も練習に励む一方、私淑していた藤井清水先生に師事して、作曲の勉強にも心身ともに打ち込んでいたのでした。

以後の彼の活躍の一部を年譜で紹介します。



記念碑

昭和四年三月、第三子の誕生を迎えようとしていた彼は、将来の生活設計も考え、五年ぶりに教職に就くことにしました。新設されたばかりの小石川区立竹早小学校の教壇に立った彼は、いよいよ児童への愛情が深まっていました。当時の子供たちの歌が、歌詞も曲も西洋風であるのを心配し、日本の子供たちにふさわしい、良い歌を与えるべく、そのころ望が一層強くなつていったのです。そのころの光陽は、教鞭を取る傍ら寸暇を惜しんでピアノに向かい、一日五、六時間も練習に励む一方、私淑していた藤井清水先生に師事して、作曲の勉強にも心身ともに打ち込んでいたのでした。

以後の彼の活躍の一部を年譜で紹介します。

彼は新たな希望に燃えて数々のプランを企画していましたが、昭和二年一二月二三日、突然吐血し、翌朝午前五時、帰らぬ人となつたのでした。享年五〇歳でした。

光陽の作品は、彼が亡くなつて四〇年以上たつた今も歌われています。今後もずっと歌いつがれていくことでしょう。彼の偉業をたたえる記念碑は各地に建てられました。彼の故郷の上野にある記念碑には、「童謡一路」の文字が刻まれています。

（福岡県教育委員会義務教育指導主事 中村 裕）

参考資料 「福岡県小学校用道德教育用郷土資料」

福岡県教育委員会

「河村光陽名曲集」音楽之友社

*

生涯における数知れぬ実演の記念すべき第一回だつたのです。

昭和四年二月、ラジオ放送や舞台での実演の限界に気付いた彼は、曲集を作り、形に残す必要性を強く感じ、少女小曲創作集「真珠と小鳥」を出版しました。これは、生涯に二十数冊にものぼつた作品集の处女出版だつたのです。

再び教壇に

郷

『堂々と地を踏みしめて歩け』
青少年の心に生きて

下村湖入（下村虎六郎）



『次郎物語』と湖入

下村湖人は、『次郎物語』を昭和一一年（五二歳）から書き続け、昭和二八年に完結している。

序文に、湖人はこう記している。

「前半では、次郎の生い立ちを描きつつ、実は主として『教育と母性愛』の問題を取り扱つた。教育は、愛がないと成り立たない。親は、まず子供を温かい愛情で抱いてやらなければならぬ。しつけや理屈的な教育は愛の上に成り立つものだ。彼の生活の大部分は、世の親達にそうした問題を考えてもらいたいための材料として描いたものである。だが、後半においては、次郎はもつと独立性をもつた存在になっている。彼は徐々に彼自身の内面に眼を向けてはじめ、そこに周囲から与えられる幸福以上の何ものかを探し求めようとする。したがいに、理性的、意志的、道義的になつて、いく『自己開拓者としての少年次郎』を描いた」。

湖人は、『次郎物語』の各場面をとおして自己の教育に関する理念を示している。

湖人は、「白鳥入芦花」という言葉を好んだ。この言葉の意味を『次郎物語』の朝倉先生に次のように言わせている。

「まつ白な鳥が、まつ白な芦原のなかに舞い込む。すると、そのすがたが見えなくなる。しかし、その羽風のために、いまだ眠つていた芦原が一面にそよぎだす、というのだ。お互いにこの白鳥の真似がしたいものだね」つまり、表面には出ないが、まわりの人たちに確実により影響を与えていくといふことであり、それには、相応の自己の研鑽と実践が要求されることになるが、これが湖人の学校教育や社会教育の場で、終生持ち続けた姿勢であった。

生い立ち

下村湖人は、明治一七年（一八八四）一〇月三日に、佐賀県神埼郡千代田町崎村（現在の千代田町）で生まれた。

小学生時代の湖人は、家の没落、母の死、兄と弟への祖母の偏愛などで肉親の愛情に十分恵まれて育つたとはいえない。持ち前の負けん氣で、不遇な環境に耐えてはいたが、幼い心中に、すでに孤独の味を噛みしめるこ



下村湖人生家 佐賀県神埼郡千代田町崎村

教師時代

佐賀中学校のころ

らの誇いを受けて加入した。このグループで、人生、社会、思想の問題を熱心に語り合い、心から尊敬していた。

湖人が請われて母校佐賀中学校の教壇に英語教師として立つたのは、明治四四年、二七歳の時であった。

湖人は、教師として思う存分の活躍をした。生徒の先頭に立つて、何事にも真剣に取り組んだ。やせぎで中背の彼は、目つきが鋭く、

明治三一年、佐賀中学校入学。人生そのもののをじっくりと考え、人間として誠實に生きようと思志す学生のグループがあつた。湖人は、高田保馬（後の京都大学教授、文化功労者）

湖人は内田夕闇の筆名で詩作に励んだ。

明治三六年、熊本の第五高等学校に入学。

多彩な才能の開花と友情に恵まれた生活であったが、湖人の生涯を左右した畏友田沢義鋪（佐賀県鹿島市出身。後の貴族院議員、青年団指導者）との出会いもあつた。湖人は田沢の人間の大きさに傾倒していたが、田沢もまた、湖人の内面の深さ、志操の高さ、ものの真実を突きとめずにはおかないと哲人的風格を心から尊敬していた。

明治三九年、東京帝国大学英文科に入学。湖人は、『帝國文学』の編集委員となり、作品の発表と同時に、活発な評論活動を展開した。明治四二年、卒業。

生徒を叱るときも、本氣で激しく叱った。常に精進を求めた。

また、英語教師のために県立図書館長を呼んでフランス語を教えてもらつたり、国漢の先生たちとお寺に心経の講義を聞きにいったり、社会教育関係の講演に出かけたりした。自分では、佐賀連隊の将校たちに英語を教えた。

校友会誌『榮城』創立四十周年記念号（大正五年二月発行）に「知恵と勇氣と努力」と題して次のように記している。

「生死の境に明鏡の如く利劍の如く光れる一瞬、将来に瞬刻の時間もないと自覺する一瞬、我々は必ずや冰山の如く静かに、猛火の如く荒れ狂ふ莊嚴なる心靈の姿を見るであろう。

この境地、然り、この一瞬の境地を死に臨む五〇年前から刻々に我等の胸裏に見出すことが出来たならば、我々の人格は如何に躍動し、如何に輝くであろう。（後略）

湖人の教師としての覇気が満ちあふれていたことがうかがえる。

若い教師や生徒たちに対する、こう言つて忠告していた。

「堂々と地を踏みしめて歩け」

しかし、湖人は、生徒に厳しさを求めるだけではなくつた。

自宅にはいつも数人の生徒を預かっていた。

その多くは保護者がもてあまして頼んだ子だった。湖人は一人ひとりゆきどいた面倒を

しゃらくは茫然としていた。

それ以来、湖人は、唐津中学の黄金時代といわれる三年間を、信望を一身に集めつつ作りあげたのである。

唐津中学の校友会誌『鶴聲』三号（大正三年二月発行）に、「自己表現と奉仕」と題し、約八〇〇字に及ぶ論文を書いて、苦しみを通して自己を深めることの意義を説いている。

「苦難は完成への道である。苦難と戦ひつゝ喜悦に満ちて人生の道程を歩むところ、そこには我々は正しき自己表現の意義を見出す。それは同時に至純至高なる普遍への奉仕そのものである」

「自己表現と奉仕との融合一致、これ即ち人間の永遠にして亡びざる真実道である」

湖人は、校歌を作詞した。これは、会心の作であつた。

唐津中学校校歌

宇宙の御生命大日輪の

潮に競ひて昇るを見つ

息づく我等は光の海の

光の男の子 光 光 光の男の子

（第二節以下略）

この校歌の各節は、それぞれ「光」「力」「望」で結ばれているが、その意は、

「我等は校長の残された校歌と、最後の御教訓

「眞の偉人は眞に謙遜する人なり」と言ふ



現在の鹿島高等学校（旧制鹿島中学校）の校門のそばにある校歌の歌碑。下村湖人が校長のときに作詞した校歌が刻んである。



佐賀中学校校舎 下村湖人は、ここで学び、後に教師として奉職した

鹿島中学校の青年校長

大正九年三十六歳のとき、鹿島中学校（佐賀県鹿島市）の校長を命じられた。

前校長の巖崎さんはうつて変わつて、生徒

の意見を聞いたり、自分で校歌を作つて発表

「光とは理想へのあこがれと自己純粹化の姿

であり、力とは働きを表現する無上のシンボ

ルであり、望とは将来への躍進」

であり、これは、湖人の生徒への思いの凝縮であつた。

唐津中学校の黄金時代

湖人は、唐津中学校に、大正七年から九年まで教頭として、大正一二年から一四年まで

校長として勤めている。

下村校長を迎えた日の生徒たちの雰囲気はストライキの余波が残つたりして、必ずしも穏やかでなかつた。しかし、湖人は、よく透

る声で静かに就任のあいさつを述べた。二時

間にわたる演説をまるで氣の呑まれたよう

事をせめてもの御形見として将来に進まう」と『鶴聲』にある。

台北中学校・高等学校を最後に教職を去る

大正一四年（一九二五）六月、湖人は、台湾第一中学校長として赴任。昭和四年二月、

台北高等学校教頭に転任。九月同校校長となる。昭和六年、台北高等学校を退任。

このときをもつて、前後二〇年にわたる湖人の教師時代が終わつたのである。

社会教育への道

台湾から上京した湖人は、田沢義鋪に協力して社会教育に携わつた。青年団、壯年団の指導者として全国を遊説した。昭和二〇年、

夫人菊千代が亡くなり、湖人は余生を、いよいよ仕事一本に捧げる覚悟をし、『次郎物語』の完成に全力を注いだ。だが、体が弱つていき、昭和三〇年四月二〇日、「菊千代」と亡妻の名をつぶやくように口にして、眠るように逝つた。その死に顔には、生涯を学校教育、社会教育に捧げて生き抜いた人物の美しい安らぎがあつた。

参考文献
○「下村湖人伝」永杉喜輔著 柏樹社
○郷土史にかがやく人ひと田中伸太郎著 佐賀県青少年育成県民会議
（佐賀県教育委員会教育長 志岐常文）

みた。これは後に校長になつてからも続けた。

生涯、青少年が湖人のまわりにつきまとい、教師をやめたあとの著述生活でも若者が対象であつたし、それが湖人の一生を貫いた仕事であった。

たた。

会では生徒と一緒に歌つたりして、全校に自由闊達な雰囲気をみなぎらせ「進歩的青年校長」としての信頼を高めていった。五

校長宅にはいつも数人の手に負えない生徒たちを預かり、それぞれの生徒に応じた教育を施して立ち直らせていく。人間にクズはない」というのが湖人の信念であった。五

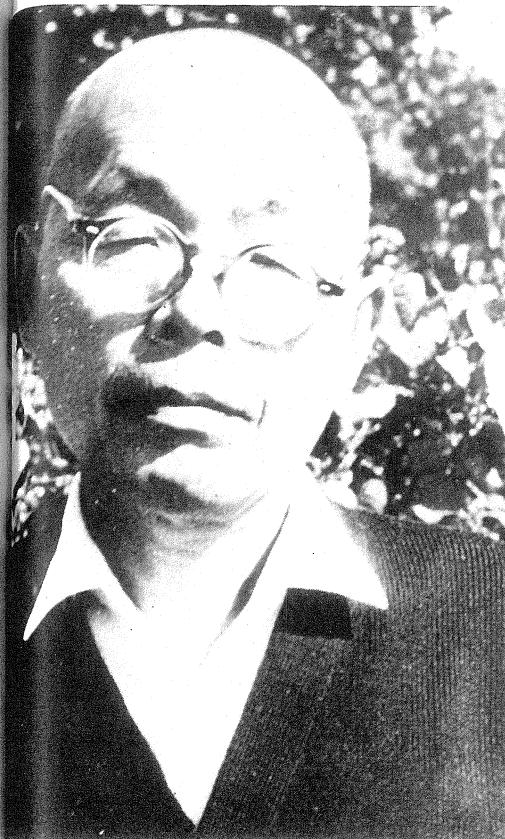
高時代からの友の田沢義鋪と会い、夜を徹して社会情勢を論じ、将来の抱負を語り合い、終生協力することを約束して固い握手をかわしたのもそのころである。

唐津中学校（佐賀県唐津市）の校長として赴任することとなつたとき、鹿島中学校の生徒たちは、留任運動を起こうとした、下村校長を慕つて、唐津中学校に転校を申し出る者まで出た。

唐津中学校（佐賀県唐津市）の校長として赴任することとなつたとき、鹿島中学校の生徒たちは、留任運動を起こうとした、下村校長を慕つて、唐津中学校に転校を申し出る者まで出た。

のんき・のんき・げんき 精神薄弱教育の先覚者

近藤益雄



わかれは／ひといらの／おぢばと／なりだ
／つちに／さり／つちに／くつま／
ひといらの／わかれはと

まるで辞世の詩を思われるが、近藤益雄は昭和三九年五月、妻子らが施設の子どもたちを引きつれて農園に出かけたあと、寮の自室

近藤は東京の大学に在学中、スマム街の託児所の手伝いをしたことがきっかけで教育の道に入り、戦前は、離島へき地の貧しい子どもたちに綴り方による生活教育を行い、戦後は、精神薄弱児の教育に携わった。特に戦後の十数年は、長崎県北松浦郡佐々町に任意施設「のぞく寮」、さらに「なづな寮」を設立し、文字どおり二四時間精神薄弱児と一緒に起居をち、子どもとともに生きた五七年の生涯を閉じた。精神薄弱教育不毛のときにあって、孤峰のようにそびえていた近藤の死は、まことにバイオニアの宿命を思わせる。

児所の手伝いをしたことがきっかけで教育の道に入り、戦前は、離島へき地の貧しい子どもたちに綴り方による生活教育を行い、戦後は、精神薄弱児の教育に携わった。特に戦後の十数年は、長崎県北松浦郡佐々町に任意施設「のぞく寮」、さらに「なづな寮」を設立して、文字どおり二四時間精神薄弱児と一緒に生活をともにして苦心さんたらん、遂に力尽き、道なきばにして倒れたのである。

近頃は、ヨーロッパの文化七傑のうち、ノラードのとき父を失い、母と二人で郷里平戸に移住。大正一三年、中学猶興館から国学院大学高等師範部へ進む。在学中、ふとした機縁から東鶴の桜楓会（日本女子大学の同窓会）巢鶴託児所で奉仕活動に従事した。このことが、その後の彼の歩みを方向づけた。

二つの出会い

彼はそこで昼間は子どもたちと砂遊びをして、夜は勤労書年たちに国

語を教えた。すべて無報酬であつたが、奉仕の仕事が楽しくて学業はうち捨てて没頭した。託児所におけるこの体験が彼を人間愛に目覚めさせ、社会に目を開かせた。そして学友たちがほとんど都會の中学教師を希望するなかで、彼は草深い田舎の小学校で、恵まれない子どもと一生をともにしたいと願うようになる。

彼はまた、学生時代に生涯の宝と出会つた大学在学中、村野四郎、川路柳虹などの知遇を得て詩を発表するが、その美しい叙情と格

፩፻፲፭

以来、えい子は近藤のよき理解者として苦樂をともにすること三八年。その間、三男四女の育児、乏しい家計のやりくり、そして、世渡りのへたな近藤に代わって「のぎ寮」の經營と、縦横の活躍をして夫を支えた。そんな妻を彼は「どんな嵐の中に立つても、望みをいだいて喜ぶ人間」と評価して終生深い愛を傾けた。彼女は文筆の才にも恵まれ、「厨にありて」、「きえた子供会」等は世評も高く、昭和四三年、吉川英治賞を受けた。

大学生のころから、弱い子や貧しい者への想いをつのらせていた近藤は、卒業すると何のためらいもなく郷里に帰つて小学校の代用

教員になつた。小学校教諭として一五年、彼が歩いた学校は、いずれも磯の香と土のおいのする辺地 離島ばかりである。彼はそして、今井誉次郎や小砂丘忠義らの教えを受けられた」と述懐しているように、「ひとり残らず、書ける子どもにしてやろう」と願い、西海の、そしてその果ての、ランプのもので暮らす子どもたちに綴り方を通じての生活教育に全身を燃焼させた。

生活綴り方運動に対する弾圧は露骨になり、彼の家にも特高（政治・思想担当の警察官）がしきりに出入りするようになる。「綴り方はやるな」との忠告や圧力にもかかわらず文集を出し続け、国語教育史に残る日本一の文集「勉強兵隊」などを発表した。「書かせることで子どもの中に入り、入ることによって子どもの生活も伸びる」ことを願つた彼は、書かせないではいられなかつたのである。

のまごくとなずな

昭和三七年、彼は定年を待たず三四年内に及ぶ公立学校教員の生活に終止符をうち、寮を学園と改めて精神薄弱児の教育に専念するとともに、その退職金のすべてを注ぎ込んで成人のための「なすな寮」を設立した。学校と寮を一本化し、子どもから大人までの一貫した精神薄弱教育の理想を実現させたのである。

686

昭和三八年、のぎく学園創立一〇周年の記念行事を盛大に終えたその翌年、多年にわたる心身の酷使は遂に病魔のおかどころとなつて、入院。そして、一時帰宅した五月一七日の朝、妻のえい子に「お椀で白めしを食べたい」と言つた。思えばこの一〇年余り、ずっと子どもたちと同じ麦飯を、同じアルミの食器でとり続けていたのだった。

午後、静まりかえった「のぎく学園」の自室で「疲れた。今後が耐えきれない」と悲痛なことばを遺してわれどわが身を絶つた。近藤がその教育実践の中から提唱した「のんき・こんき・げんき」は、今や広く精神薄弱教育に携わる人びとの間で、自らを励ますモットーとなつてゐるが、その三気の重要さを知り



A black and white photograph capturing a moment of interaction between a man and several children. The man, positioned in the center, wears glasses and a dark jacket, gesturing with his hands as if speaking or explaining something. Around him are five children, some of whom are wearing traditional Korean clothing such as gat (hats) and jeogori (jackets). The setting appears to be outdoors, possibly at a school or a similar educational institution, with a fence and trees visible in the background.

殊學級の担任へ——世間は好奇の目を向け、新聞も大きく取り上げた。しかし、近藤にどうつては、校長職をなげうつことは「深刻なこ

とでも悲痛なことでもない、極めて当たり前のこと”であり、「教師の一人としてやらねばならぬことをやる」までのことだった。長年にわたる辺地での生活継り方教育によつて、だれでも人間として人間らしく生きていける確かな経験を持つ彼が、今度は、世間からいいたげられている知恵遅れの子どもの人間らしさの回復とその自立に立ち向かつただけのことであつて、彼にこつては当然の教育的發展であつたわけである。

当時、精神薄弱児を教育することについてはまだ認識も薄く、特殊学級も皆無に近かつた。伝え聞いて県外からも入級の希望が相次いだが、彼らを下宿させる家とてない。それに、三〇人にも及ぶ子どもたちと起居をともにし、さらには徹底した二四時間の生活教育を行おうとすれば、彼らを収容する施設がどうしても必要になる。近藤は、なげなしの財布をはたいて、放置されていた旧農學校の校舎を払い下げてもらい、昭和二八年、精神薄弱児のための寮を開設した。「その花は貧しくども、この世の風霜に耐えて咲け」と願い、秋の開設にちなんで「のぎく寮」と名付け、庭の隅に「風の中に一本のマツチの火を守るがごとく」と立札を置いた。公的補助をいつざまに受けない個人の任意施設であつた。彼は一家を挙げてそこに移り住み、「のぎく寮」は近

全くした彼にしてなお、精神尽き果てたのである。先生の死を知られて、死とはどんなことが理解できない子どもたちが、三日三晩学園のまわりを「せんせい、せんせい」とよぶらん限りの声をはりあげて、暗い闇の中、沂

近藤が義務化された昭和五四年まで続けられた。その二五年の間に、近藤一家と生活をともにした精神薄弱児は百数十名を数える。近藤が五七歳の生涯を閉じるまで実践し、思索する過程で書き記した「子どもと生きる」「この子らも・かく」等不朽の著書は『近藤益雄著作集』全八巻にまとめられている。まことに、彼は文部大臣表彰、ヘレン・ケラー賞、読売教育賞など多くの賞を受けた。

(長崎県教育センター所長 塚野克己)

名利を超えた清廉な教育者

井 芹 経 平



一、人を見る明

昭和三五年秋、數学者として文化勲章を受けた岡潔は、その著『春宵十話』に次のように文を載せている。

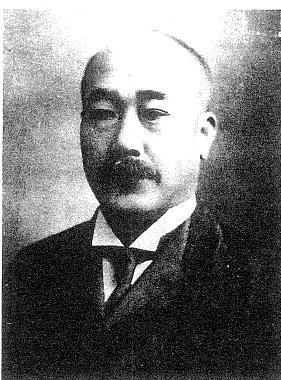
◎吉川英治さんのこと

授章式の翌晩、池田首相の招待で晩さん会があり、忙しい池田（勇人）さんの代わりに荒木（万寿夫、文相）さんが主人役をつとめてくれた。この席では吉川さん、昔のだれぞは偉かつたという実例として、熊本のある中学校長の名が持ち出されたりした。この校長は、東郷元帥の息子さんの顔をじつとみつめて「東郷さんあなたの前だが、息子さんは百姓をさせるのが一番よいなあ」といきつた。東郷さんもそれを受け入れて、新宿御苑の菊作りをさせたのである。

さてこの文中に出てくる「熊本のある中学校長」と「東郷元帥の息子さん」が、済々賞第五代賞長井芹経平と、同賞明治四〇年の卒業を伝えたが、井芹は済々賞長佐々克堂の懸請黙止しがたく、決然名利を顧みず信義に生きたのである。

三、教育活動前期

井芹の済々賞在職は私立・県立時代を通じて前後三年にわたり、その間、自他ともに創立者佐々克堂の後継者を以て任せた。すなはちその教育精神——三綱領（一、倫理を正しうし大義を明らかにする。二、廉恥を重んじ元気を振る。三、知識を磨き文明を進む。）——の実践と、質実剛健・簡易素朴な賞風の育成にあたったが、その教育活動は明治三三年を境におおむね二期に分けることができる。



済々賞創立者 佐々友房(克堂)

その前半期は済々賞から熊本中学が分れるまでの一三年間で、初め教頭として佐々・木村・八重野三代の賞長を補佐し、次いで第五代賞長として、県下尋常中学教育の施設を漸次済々賞に統合し、一方私立から漸次県立に移行せしめ、さらに熊本中学校をはじめ、八代・鹿本・天草などの分校それに私立女子では尚絅校をそれぞれ発展的に分離独立させることに尽力した。

その後半期は、済々賞が現在地の新賞舎に移つて以後二三年間で、済々賞も守成の期に入り、むしろ教育内容整備の時代であったの

二、熊本の教育界に

新風を吹込む

井芹経平は、慶應元年五月一日、熊本県上益城郡甲佐町の名門（造酒業）の三男として生をうけ、幼少のころからすこぶる英悟、小中学生ともに抜群の成績で業を卒え、明治一六年衆望を負うて進んで、東京高等師範学校に学び、ここにおいても天稟の才氣はいよいよさえを見せ、常に首席を占めたので、校長山川浩は、井芹の傑出せる人物と、その才気に對して深く嘱目するところがあつたといわれている。

井芹経平は、慶應元年五月一日、熊本県上益城郡甲佐町の名門（造酒業）の三男として生をうけ、幼少のころからすこぶる英悟、小中学生ともに抜群の成績で業を卒え、明治一六年衆望を負うて進んで、東京高等師範学校に学び、ここにおいても天稟の才氣はいよいよさえを見せ、常に首席を占めたので、校長山川浩は、井芹の傑出せる人物と、その才気に對して深く嘱目するところがあつたといわれている。

四、教育活動後期

井芹経平は、慶應元年五月一日、熊本県上益城郡甲佐町の名門（造酒業）の三男として生をうけ、幼少のころからすこぶる英悟、小中学生ともに抜群の成績で業を卒え、明治一六年衆望を負うて進んで、東京高等師範学校に学び、ここにおいても天稟の才氣はいよいよさえを見せ、常に首席を占めたので、校長山川浩は、井芹の傑出せる人物と、その才気に對して深く嘱目するところがあつたといわれている。

で、その方面的充実と発展に力を注ぐとともに、徳富蘇峰が『熊本教育の双璧』と推称したように、分身熊本中学校長野田寛とともに、隠然県下中等教育界をリードしていった。

明治三三年済々賛が藪の内から黒髪の地に移ると、井芹はますます氣を新たにして鋭意その經營と發展に精励したが、同三六年一二月八日、不運にも、前年秋の大演習には外國武官の宿舎となり、西日本一を誇った全賛舎が鳥有に帰するという大厄に遭遇した。その時、井芹は、少しも周章ろうばいすることなく、直ちに應急の策を講じ、授業を開始するはもちろん、万遺漏のない処置をとったことは識者の感歎措かなかつたところであった。

しかし明治三七年一月から三九年六月まで、いわゆるバラツク時代で、その困苦不便は真に言語に絶するものがあつた。それでもその間職員・生徒・父兄いささかも嫌惡の色を示さず、孜々として本分に励み、他の時代に比べてかえつて人材を輩出させ、また復興ぶりの目覚ましかつたことは全く彼の才腕と德化によつたといふよりほかあるまい。

これより先、明治三四年、正科以外に奨学運動の二部を設置したのは、今日の特別教育活動に先へんをつけたものといえよう。すなわち機関雑誌『多士』の発刊は奨学部事業の一環で、現在まで連綿と繼承されている。また生徒の読物として彼が著した『宮本武蔵』

五月に帰朝、大いに新うん蓄を傾けてますます同賛發展に寄与せんとしたが、外遊中に患つた神經痛が悪化し、大正一二年六月、遂に勇退病を養うの余儀なきに至つた。

井芹勇退の報一たび伝わると、日室社長野口遵は、七万円の巨額を提供して、理想的な學舎設立を勧めている。これより先、井芹は明治二三年国会開設の記念として、すでに『二三學舎』を設け子弟を親しく訓育していたが、新たに學舎を設け、舎名はそのままとし、別に監督として済々賛教諭林田敏貞の助力を乞い、嚴格な中に極めて家庭的に教育指導に当たつていたが、再設四年目、大正一五年二月一四日、病重く遂に不帰の客となつた。越えて一八日済々賛は斎場を賛庭に設け、嚴肅な葬禮の礼を執行し、永遠に済々賛を見守るのに絶好の靈地小峰の丘に葬つた。

五、井芹の偉大さ

井芹は生前全国中学校長会議において、乃木將軍をほうふつさせる風ぼうと、豪放らいらくな清濁併せ呑む人柄で断然異彩を放ち、その議論は重視され、「東の水戸に菊池謙二郎あり、西の熊本に井芹経平あり。」と日本の代表的教育家に挙げられていたことはよく知られた事実である。また彼は名実ともに本県教育の長老であり、加えて社交性に富み、全国



井芹経平の胸像が建つ済々賛正面



熊本中学校初代校長 野田寛

の巻頭に「本賛平生新免武蔵を推崇して我が武道の宗師とす」と記しているように、剣道を訓育の根本におき、上級生には正課同様全員に課した。しかも、彼自身武蔵については單に崇拜するのみならず、冨明流の兵法まで深い研究を遂げ、また「独行道」をみずから体験したともいわれている。その他つどに熊本中学校長野田らと計り、熊本学生講武会を起こすなど、県下武道の振興に尽した功績は大きかつた。

その他三綱領に加えて八条目の制定、賛歌の選定、朝礼の開催、斯道文庫の開設、自省週録、課外授業、模擬試験、父兄会、家庭訪問、教場食事監督、賛内洒掃、兎狩、行軍等々が、機会を逸せず、實行された。そして生徒の学力向上、身体の鍛錬・情操徳性の涵養にひたすら邁進し、佐々によって築かれた基礎の上に不滅の伝統、輝く歴史を飾ることどもに、野田寛の熊本中学と一幹兩枝の親しみの中に、好箇のコントラストを示しつつ、熊本の教育をうちたて名校たる名をほしいままにしたのである。

大正六年七月、元来清貧に甘んじ、すぐぶる恬淡な彼も、子息教養の恩顧に報いんどする財界の雄、山下龜三郎の、再にわたる厚志を無下に拒みきれず、米國視察に上り、翌年

教育会、本県教育会、茗溪会、肥後獎学会、熊本美術会、武道關係團體等々の顧問、会長、支部長、評議員、理事として、これら各種文化團體のために尽瘁貢献した功績もまた、すこぶる大なるものがある。

済々賛では佐々を生みの親、井芹を育ての親として敬慕しているが、彼はただ済々賛のみの校長でなく、実は熊本県の校長でもあつた。否、その一生は、熊本県教育史そのものであつた。そうして、後代の教育者が渴仰実践すべき余りにも多くのものを持つていた。

ここに井芹の偉大さがある。

なお彼は多才多能多趣味であつた。書画・骨どう刀劍の鑑定、さらには詩文、謡曲、園芸一として可ならざるものはなかつた。しかも筆をとれば、書に画に豊かな天分を示し、ことに百態の蘭を描いては専門家を驚嘆せしめたといわれ、大正一二年惜しまれて勇退したが、その心境を「清風明月に起臥して山高水長の大自然に融合した心境で、天下人事の至福である。」とのべ、まさに円熟の域に達した人柄の一面がうかがわれるようである。

井芹は生前全国中学校長会議において、乃木將軍をほうふつさせる風ぼうと、豪放らいらくな清濁併せ呑む人柄で断然異彩を放ち、その議論は重視され、「東の水戸に菊池謙二郎あり、西の熊本に井芹経平あり。」と日本の代表的教育家に挙げられていたことはよく知られた事実である。また彼は名実ともに本県教育の長老であり、加えて社交性に富み、全国

- 井芹経平先生伝（井芹経平先生伝記刊行会）
○済々賛百年史（済々賛百周年記念事業委員会）
○熊本県近代文化功労者（熊本県教育委員会）

（熊本教育振興会長 本田不二郎）

教育に捧げた生涯 大分県女子教育の先覚者

岩田英子

明治四四年（一九一一年）、県下初の実科高等女学校として「私立岩田実科高等女学校」が発足した。その創始者が岩田英子である。



裁縫教育を志す

岩田英子（一八七三～一九三二）は本名工い、旧大分町で代々庄屋を務めていた家の生まれた。幼くして両親と死別、妹のキクとともに祖母トヨに育てられた。

大分高等小学校を卒業すると大分尋常小学校の簡易科教員となつたが、一年で退職。明治二八年（一八九五）、婿養子計二郎が病死して未亡人になると、再縁の勧めを拒み、二十三歳にして断髪、生涯貞節を貫いた。翌年、養

蚕研究家の浩を婿養子に迎えたキクに家督を譲り、養蚕に都合のよい中島に転居する。

元来子ども好きで保母を志していた英子は、明治三一年、大分幼稚園に勤務した。しかし唱歌の素養がないために指導力の不足を悟ると、翌年七月には退職して上京し、東京女子高等師範学校保母練習科の門をたたいた。ところが生徒募集は既に中止されていたため、帰るに帰れない英子は、裁縫教育に転向することにし、東京裁縫女学校（のちの東京女子専門学校、現東京家政大学）高等科に入学した。この時の決意が後の自分の人生を決することにならうとは、英子自身思いもよらなかつたであろう。その後は破格の短期履習をこなし、明治三三年二月に卒業した。これを基礎資格として、翌年には文部省検定試験に合格し、裁縫科中等教員免許を得るのである。

彼は学術、私は芸

帰郷した英子は、大分高等小学校裁縫教員を退職して自宅で裁縫塾を開いていたキクを手伝つたところ、たちまち生徒が急増した。そこでこれを足場に、学校設立の企画を実行

に移すこととした。ところが、前年の高等女学校令の公表により、大分には明治三三年四月に県立大分高等女学校が開設されたばかりで、「二校併立は冒険」と危惧する者もあつた。しかし英子は、「彼は学術を主とし、私は技術を以て生命とす」と、彼の守備範囲を明確にして周囲を説得、同年七月、ついに「私立大分裁縫伝習所」を発足させた。こうして県下女子教育草創期に、當時としては全国的にもまれな女性教育家が誕生したのである。

当時の学則によると、裁縫のほかに家事・国語・算術・修身が正科で、作法・茶道の隨意科も設けており、当初から裁縫専修の方針ではなかつたようである。「技術を以て生命とす」とはいえ、広い教養の上に立つた技術の養成を目指したのである。

岩田学園の隆盛につながつてゐる。

明治三四年（一九〇二）四月、「私立大分裁縫学校」と改称し、正式の女学校への昇格を目指して普通科二年、高等科一年の三年制とした。当時は生徒増に校舎増築が追いつかず、そこでこれを足場に、学校設立の企画を実行する。

次いで明治四二年、「私立岩田女学校」と改称。明治四四年四月には、高等女学校令の改正に基づいて「私立岩田実科高等女学校」を併置した。これにより、裁縫・手芸の中等教員検定受験資格を付与され、卒業生が直接、中等教員に登用される道を開いた。当時は公的な補助金制度もなく、年間経費と授業料収入の差額はすべて設立者の負担金で賄われている。

躍進と家族の支え

明治三四年（一九〇二）四月、「私立大分裁縫学校」と改称し、正式の女学校への昇格を目指して普通科二年、高等科一年の三年制とした。当時は生徒増に校舎増築が追いつかず、そこでこれを足場に、学校設立の企画を実行する。

教育発展のために、英子は惜しげもなく岩家の私財をつぎ込んでいたのである。

大正三年、校則を改正し、専修科・研究科を設置した。昭和二年には、生徒の裁縫技術の向上と習得の便を図るために「和服裁縫参考書」を出版した。さらに昭和三年には、岩田九郎の手による校歌を制定している。

情熱と先見

「うきごとのなほこの上に積れかし限りある身の力ためさん」——英子が終生モットーにしたといわれる熊澤番山の歌である。

どうすればよりよい教育が施されるか、英子は苦心し、工夫を凝らした。そしてその教育方針は、常に当時の教育界の実情と要請に合致し、しかも時代を先取りしていた。

その一例として、大分裁縫学校主催の明治三四年（一九〇二）の夏期一ヶ月講習会が挙げられる。実業教育・女子教育の必要性が叫ばれる中、東京帰りの英子のざん新たな裁縫教授が人気を呼び、正教員免許取得を目指す県下の裁縫教員が先を争つて受講。その結果、多數の受講生が検定試験に合格するという実績が生まれ、大分裁縫学校の名を搖るぎないものにしたのである。

六歳から、近所の教会牧師の妹に英語を学び、また一七歳からは個人教授について漢字を習得するなど、常に自己研さん努めている。

教育活動に社会活動にと、多忙な英子であったが、風流面でも非常にたしなみが深い。茶道はすでに一二歳、華道は一九歳のころに学んでいる。その他にも刺繡、染物、琴、謡曲、日本画、書道、俳句、盆石、園芸と、その趣味は実に多方面にわたっている。

「何でもやる、負けるのが嫌いだ。人がやるのに自分がやれぬことはない。だれよりも先にならねばいかぬ。それで、やりだしたら一生懸命にやる」——英子が公的活動も含めてこれほど多方面に心身を投じたのは、そのもう盛なチャレンジ精神によるることは言うまでもないが、それだけではあるまい。幼くして両親に死別し、若くして夫に先立たれたわびしさを内に秘めていた英子の心は、つれづれに時をすごすことによく耐えられなかつたのではないか。英子の多趣味は、時間をもてないだろうか。英子の多趣味は、時間もてあましめた風流人の手すきではなく、まさに「忙中閑の遊び」であつたのだろう。

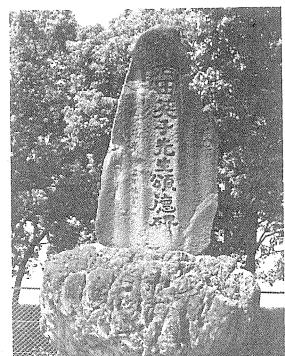
ホントの人間に

「いちばんの楽しみは、どこを歩いていても、りっぱな奥さんになつた教え子の人たち

多方面の活躍



岩田英子の遺墨



徳富蘇峰揮毫の「岩田英子先生頌徳碑」

英子は自校の充実発展に力を注ぐだけでなく、例えば大分医師会主催の看護婦養成ために自校を夜間に開放提供するなど、社会教育のためにも協力を惜しまなかつた。また大分婦人会を起こしてその評議員となり、同三七年には愛國婦人会特別会員に列して、同会大分県支部評議員嘱託となつた。

昭和三年（一九二八）、昭和天皇即位の御大典に際して、女子教育に特に功勞ありとして、昭和六年、愛國婦人会總裁から「一等有功章」を贈与される。ほかにも日本赤十字社特別社員、日本赤十字社篤志看護婦人会大分支会副会長、大分連合婦人会会长などを歴任した。

老いた祖母のめんどうを見、妹に学問をさせるために上級学校への進学を断念した英子であつたが、やはり向學心は捨て切れないかつたのである。一四歳ごろ、大分中学校教師ウェンライトに英語を学んでいるその後も一からフイによびかけられる時です」——大正九年（一九二〇）、創立二十周年にあたつて、「質実・勤勉・貞淑・温雅」の校訓が制定されたが、はからずもこれがそのまま英子自身の人徳を表していると言えよう。「人に接するや謙讓、子女を見るや慈仁」、これが英子の人柄にふれた人々の共通の印象であつた。

英子は「勝氣を理性で包んだような人」とよく言われ、向こうう氣の強さが伝えられていくが、幼少のころは内氣でおとなしい性格であつたらしく。それが、成長するにつれて強気な性格に変わつたと言われる英子の生涯を思うとき、運命のいたずらというものを感ぜずにはいられない。

昭和七年（一九三二）、六月半ばから病床に就いていた英子は、遂に九月二二日、帰らぬ人となつた（享年六〇歳）。臨終の言葉は「食うていくばかりでなしに、ホントの人間におなりなさいよ」——学校教育だけではなく、まさに人間教育に全精神を傾けた生涯であつた。

【参考文献】

- 岩田女学校校長伝記編纂会（乾政雄）編『岩田英子先生』
大分合同新聞社編『大分県人物伝』
西日本新聞社編『大分人脈』
山川出版社編『大分県の百年』
大分県教育委員会編『大分県教育百年史』
（大分県教育委員会文化課指導主任）田本政宏

社会福祉事業の先駆者 孤児の父

石井十次



縄の帶

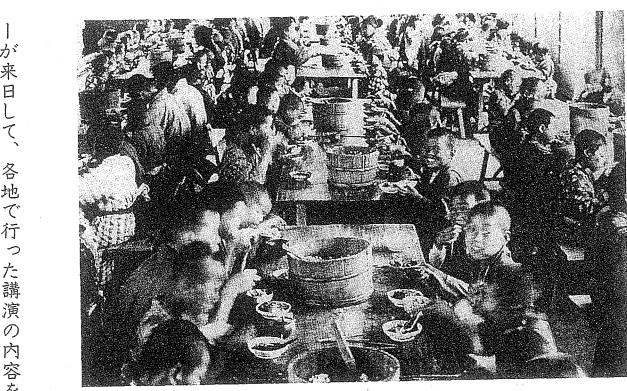
現在のような豊かな時代と違い、「福祉」という言葉さえ定着していなかつた明治二〇年に、弱冠二二歳の身で、孤児救済の事業に着手した人物がいた。彼は岡山孤児院を創設し、大阪に愛染園託児所、郷里宮崎県に茶臼原孤児院を経営し、日本における社会福祉事業の先駆者として、孤児教育にその生涯をささげたのである。

この人物の名は、石井十次。慶應元年（一八六五）四月一日、宮崎県児湯郡上江村（現高鍋町）馬場原に生まれた。高鍋藩士の父万吉、母乃婦子の長男である。十次の生家は馬場原に現存し、史跡として県指定文化財となつてゐる。

少年時代の十次は、体格も優れ腕白に育つたが、また、きわめて純情であつた。七歳のころ、天神様の秋祭りに、母の心づくしの新しい着物につむぎの帯をしめてもらつて出かけた。ところが帰つてきた十次は縄の帯をしめていた。「友だちの松ちゃんが縄の帯をしていた、みんなから、からかわれていたので、取り替えてやつたのです」との説明に、母は、「それはよいことをしたね」とほめて喜んでくれた。このときの言葉が成長していく十次の心に大きな感動と影響を与えることになつた。母乃婦子は、困つてゐる村人に常に温かい手の苦労は並大抵ではなかつたのである。医学の継続が、孤児救済など迷つてゐたが、「人は二主に仕えることはできない」との聖書の教えに従い、六年間学び続けた医学書、ノート類のすべてを焼き、年来の苦惱を精算した。当時孤児は五一名であったが、明治二四年の濃尾地震で九三名を加え、二六年には二二〇余名を数えた。二八年、それまで苦楽をともにした妻品子は三人の娘を残して病没している。

その後、院児による音楽幻灯隊を組織し、国内各地ばかりでなく、国外（ハワイ、台湾等）にまで公演活動を広げ、孤児たちの持つ能力を發揮させるとともに、寒情を社会に訴えた。明治三七年に始まつた日露戦争による多くの戦争孤児と、三八年の東北地方の冷害大飢饉（まん）で八〇〇余名を受け入れ、岡山孤児院は、一二〇〇余名の大家族となつた。

十次の教育理念



食事風景

十次は、不幸な災害にあり、父母と離れた子どもたちにただ住む家と食べ物だけを与えることを考えていたのではなかつた。父母に代わつて、心と体が健康で、教育を受け、職業技術を身につけた社会人の育成を考えた。すなわち、養育・教育・自立をねらいとしたのである。

幼年時代（遊はせる）少年時代（学ばせる）青年時代（働く）といふ「時代教育法」に思い至つたのは明治三〇年ごろであつた。この方針を実現させるため、私立岡山尋常高等小学校

一二〇〇人の大家族

十次が岡山医学校を卒業し、岡山市近郊の阿知診療所に代診で勤めていたとき、隣の大師堂で三人連れの母子巡礼とめぐり会い、男の子を取り戻すことになつたのが孤児教育との出会いであった。その後、薄幸な子を加え、市の三友寺に「孤児教育会」の看板を掲げ、救済事業を始めた。

一が来日して、各地で行つた講演の内容を読み、感動した十次は、日本のミュラーになろうと決心した。

しかし、孤児の世話は、生やさしい事ではなかつた。衣食住への心くばり、経費の調達

を孤児院内に開校（三〇〇年一二月）した。校長に高山甲子郎を迎へ、後に龜山依太郎（岡山師範訓導）により充実進展を見たのである。注目すべきは、岡山孤児院からの小学校就学率一〇〇%の事実である。一般家庭の子弟の就学（参考・明治三三年八一・五%）でさえこれほどではない当時の社会においては希有の事に属する。

古今内外の教育家、宗教家、社会事業家等

白原で開墾作業に取りかかった。原野の開墾は難作業で、この隊に指導者として加わったいた山室軍平氏（後日本大救世軍創始者）の手記によると、「その労苦、筆舌につくし難し、されど精神的によく統率せられ、大自然の中でよく頑張った」と記されている。

愛情の僕約を知らぬ黒

石井十次の銅像（3人像）

里見の建文
して揺るがぬ人間教育の理念・方法の多くを述べるのである。

王水照の延説

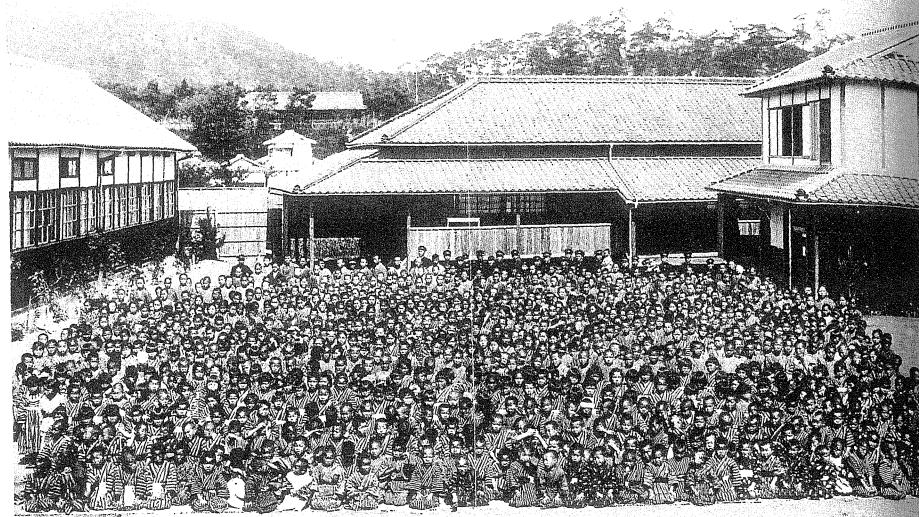
孤児院創設のころから、御里において、理想とする「鍼鍼主義教育」（生活に必要なものは自分たちの手で作る）の実行を考えていた。

岡山市旭川河口から日向灘を越え、高鍋町
小丸川河口に陸揚げ、荷馬車で八畳のでこぼ
こ道、急坂を運んだ。広野に數十棟の宿舎、
学校、集会所が出現し、大正元年春、女子部

「君は日本で一番見識のある、腹のしつかりした信仰の固い、慈善事業家であった。新時代にこの道の^{道筋}魁けをなした人、君の孤児救濟事業は、その規模の大なること、成功の著しいことにおいて比類がない。逢う人、触れる者に対して、持てる愛情を悉くしぼり出した人、愛情の僕約^{ハグヨウ}ということを知らない人であ

A black and white photograph showing a large crowd of people, mostly men in traditional attire, gathered in front of a traditional Japanese building with tiled roofs and wooden frames. The scene is set outdoors, with trees and other buildings visible in the background.

1200人余りの孤児で一杯の岡山孤児院（明治40年）



1200人余りの孤児で一杯の岡山孤児院（明治40年）

以来三〇有余年、昭和二〇年八月、終戦時に、孫娘一郎は、東大文科を出て応召、最後の任地が十次の生誕地高鍋であつた。祖父父兄の靈が彼に何を告げたのか。柿原政一郎氏（元高鍋町長、県議会議長、衆議院議員）の勧めを受け、岡山の大原綱一郎と相談し、岡山孤児院を引き継ぎ、社会福祉法人「石井十次記念友愛社」を設立した。そしてまず、戦災犠牲児の収容から始めたのである。現在、県内外に、養護施設二か所、保育園五か所を経営している。町内外には、各所に銅像、胸像、詩碑、記念館の建立が見られ、財団法人「石井十次顕彰会」による、生誕記念式典、講演会、シンポジウムなどをを行っている。学校においては、「石井十次をしのぶ会」の開催ほか諸行事への参加、道徳の時間への導入等によって「思いやりの心」の育成に資している。

顕彰会では、ボランティア精神、生涯をかけた人間愛の継承・浸透と福祉意識の高揚を図るため、児童福祉への貢献を表彰する「石井十次賞」を創設し全国に呼びかけている。

(高鍋町教育長　若永高徳)

教育県の礎として いしづかへ

中等・高等教育の父

岩崎行親



心友、内村鑑三

岩崎行親は、明治九年（一八七六）、文部省直轄の英語学校（のち大学予備門、旧制第一高等学校、現東京大学の前身）の同級生、太田稻造（後の新渡戸稻造）、内村鑑三、それに植物学の世界的な権威で文化勲章を受章した宮部金吾の四人と親交を結んだ。

この四人は、身を立て道を行い、酒色を慎むという盟約を結び、「立行社」と名付けた。明治の青年らしい覇氣であろう。翌明治一〇

札幌農学校卒業後、北海道、大阪府で官吏

となつたが、病を得て退官し、東京で私塾を開いていた岩崎を、加納知事に推薦したのは時の文部次官牧野伸顕（のち文相・農相・宮

相を歴任)で、その橋渡しをしたのは杉浦重剛(当時日本中学校長、のち東宮御学問所御

用掛）であつた。時に岩崎三九歳。加納知事には「病後のことでもあり、老母（父はすで

に他界)の承諾を得てから」と即答を避け、三の友人と相談して帰宅してみると、「鹿児島県尋常中学校教諭に任ず、年俸八百円」の辞

令が届けてあつたという。
この加納知事との出会いが、岩崎の鹿児島

行きを決意する契機となるわけであるが、ここで、加納知事について触れなければならぬ。口内又宣は、明治三三年（一九〇〇）九

月まで六年八か月の長期にわたつて県政に尽くす。着任当時、県政界は吏党・民党の政争

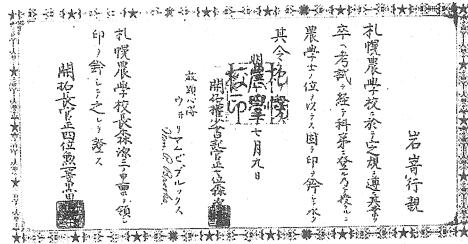
が激化し、県政は空白化していた。加納知事は、不偏不党の立場で人事の刷新を図り、ワ

ラジオで県内をくまなく回り 農・畜・水産の振興、就学の奨励、職業教育の拡充など今日の鹿児島県の経済、教育の基盤を形成し

た功績は大きく、県民は今なお彼を「殖産興業知事」として顕彰碑を建てて、その遺徳を

たたえている。知事在任中は一日の欠勤もせず、県政のため加納家の私財を投じて二万円

岩崎行親が札幌農学校を卒業の際受領した卒業証書



明治二七年（一八九四）三月、岩崎に文部省からの使いがくる。文部省には、鹿児島県知事に任命されたばかりの旧上総一宮藩主^{カササ}の加納久宣^{カミナリクマツ}が待っていた。「鹿児島に中学校ができるが、校長の適任者がおらず困つてゐる。是非赴任してほしい」とのことである。

ることになる。

岩崎行親、号は岳東。安政二年（一八五五）、香川県三豊郡比地大村（現豊中町）に生まれる。父^{むちゆき}行吉^{（むちゆき）}は、明治維新の際、神官の身

京都で公家の小侍となり、そこで国学、漢学を修めた。維新後、明治三年（一八七〇）、一四歳のとき、両親（父は太政官出仕となる）とともに東京へ出て、前記三人らと英語学校の生徒となり、終生の交わりを結ぶ。

わけても、内村鑑三とは、両者のその後の言葉や農業講が示すところ、思想、信仰上の対立が新撰組に捕らえられ、生活に困窮したためで國事にも奔走した人。行親は少年時代、父

立はあつたものの、肝胆相照らす心友であつたことがうかがわれる。

内村鑑三が、大正一五年（一九二六）、岩崎の古希賀会に送った書簡で、「……札幌農学校在学中、私どもは精神的、一大事件に遭遇——

た。それは西洋の宗教たるキリスト教の勸誘であつた。私ども同級生二〇有余人中半ばはこれに応じ、半ばはこれを拒んだ。そして當

崎君は拒みし仲間の一人であり、私は応せし者の中であつた。……私の友人中で岩崎君が最も善く私の日本魂（ニッポンコン）と讀んでほしい。『ヤマトタマシイ』には語弊があることを分かつてくれる者である。それは君自らである。

の巨債を負い、晩年、「鹿児島のことはめい土に電報せい」と遺言したほど鹿児島を愛したという。

岩崎行親は、この加納知事の熱誠にこたえて、教育と勵業の知事顧問格として、鹿児島尋常中学校（後の鹿児島一中、現鶴丸高等学校）の教頭（一年後に校長）となり、鹿児島での第一歩を踏み出す。着任当時は、岩崎自身の思い出によると、出発の際、牧野文部次官から、「このたびは遠方の所に誠に御苦労である。また、病後のこととて授業など一時間くらい受け持てばそれでよい。近くに温泉もあるから入浴しながら運動されよ」と言われたにもかかわらず、毎週一八時間の授業を担当し、校長や教頭の仕事もやり、学校の仕事が終わるごとに県庁へ、県庁での仕事を終えると知事官舎へ行き、知事と産業上の改良案や実施の方策を練つた。牛馬防疫、米作改良、排水工事、種苗改良など、農業の諸問題について知事と夜を徹して意見を戦わしたことが多かつたと言つている。

中等教育の普及と造士館の復興

鹿児島では、明治一〇年の西南の役で、西郷隆盛率いる私学校党が敗れ、多くの優れた人材が失われた。そして、県教育界もその発展が著しく阻害された。鹿児島が、この敗戦をつくりあげる。

は故あつて（旧藩主島津家の反対かと思われるが真相は不明）廃校となつた。

岩崎は、この高等中学造士館を復活して高等学校にすべきだと県議会に建議し、ついに明治三四年（一九〇二）四月、全国第七番目の旧制高校として創立に成功、初代館長（校長）として教授陣を充実し、質実剛健の校風をつくりあげる。

その晩年、ユニークな学校づくり

岩崎行親は、幼少から冒病を患い、この持病が悪化したため、一年余勤めた造士館長を大正元年（一九一二）に辞し、千葉県の海岸で静養する。そこへ、大阪で海運業を営む田中省三（鹿児島県姶良郡福山町出身、小学校教員から実業家となる）から、郷里の福山に中学校をつくりたいので御協力願いたと懇請される。大正六年（一九一七）の初秋のことである。岩崎にとって鹿児島は第二の故郷でもあり、私立福山中学校（現、県立福山高等学校）校長として、再び鹿児島の土を踏まざるをえなくなるのである。

学校経営の一切を任せられた岩崎は、雄大な桜島を臨む景観の地に学校敷地を選定し、大部分の生徒を寄宿舎に収容、その周囲に教師



鹿児島県歴史資料センター黎明館中庭に立つ七高生久遠の像

の傷手から立ち直るには、まず、教育界の陥没した人材を補わなければならなかつた。そのため、在京の先輩や歴代知事は、教育条件の整備、優秀な教師の招へいに必死になつた時代であった。

一方、加納県政の推進によつて、小学校の就学率も、明治二七年五七%に過ぎなかつたものが、明治三三年には九二%と全国のトップクラスとなり、小学校教育が普及するにつれて、中等教育の拡充がようやく県下各地の世論として高まつてきていた。

このような機運に沿つて、岩崎行親が着任した鹿児島尋常中学校の設立を皮切りに、その後三、四年の間に、尋常中造士館（高等中学造士館の廃止による。後述）、川内・加治木・川辺と尋常中学校の分校（のちそれぞれ独立）が続々と設置された。岩崎は、これらの学校の創設に尽力、創立時の校長を兼務している。

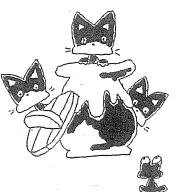
このように、岩崎行親が県教育界に残した業績の中で、欠かせないものに、第七高等学校造士館（現、國立鹿児島大学の前身）の復興である。「造士館」は、安政二年（一七七三）、藩主島津重豪によつて創設され、明治維新後は、種々の経緯を経て、高等中学造士館として受け継がれていた。

明治二七年、「高等学校令」が公布され高等学校は高等学校と改称されるが、明治二九年（一八九六）九月、鹿児島高等中学造士館にて開校した。

この住宅を配置して、校内に「敬天塾」と名付けた塾をつくる。この塾では、「敬天愛人」を教育目標に、起居、応接、礼儀、作法、言葉遣いなどを徹底して教えた。地域住民からは「福山聖人」と呼ばれてあがめられ、「岩崎、福山中にある」と聞いた県下の俊秀が、他校の入学を取り消してまで集まつてきただといふ。

岩崎行親は、大正一三年（一九二四）三月に福山中学校長の職を後進に譲り、昭和三年（一九二八）四月、自分が勤めた学校出身者中、出征して戦死した生徒の招魂碑を自費で建立し、その招魂式後倒れて七十二歳の生涯を終える。

「君は臨終の床において、門下生に向ひ、日本本の現状では死にたくない、後はよろしく諸君に頼むと遺言し、死に至るまで国を憂い世を思つてやまなかつた。君の一生は實に救世憂國の一念をもつて終始したというべきである。」



【参考文献】
岩崎行義編「岩崎行親」
南日本新聞社編「郷土人系」「鹿児島大百科事典」
鹿児島県教育委員会編「鹿児島県教育史」
関係各学校記念誌

（鹿児島県教育委員会参与・学芸専門員 谷崎哲夫）

沖縄県民の師父

志喜屋孝信



戦前、県立第二中学校長を経て、私立開南中学校を創立し、戦後は、沖縄民政府知事、琉球大学初代学長に就任し、多くの人たちに師父とあがめられた志喜屋孝信は、沖縄の人材育成と戦後の郷土復興に尽力した偉大な教育者であり政治家であった。

県内唯一の奨学生として

志喜屋孝信は、明治一七年四月一九日、具志川市赤道で父孝徳、母カマドの長男として誕生した。

幼少のころの志喜屋は、気が弱く、その上、体も丈夫でなかつたため、具志川尋常小学校に入学しても停級となり、一年あとの子どもたちと一年生からやり直さなければならなかつた。しかし、その後、成績は優秀で、学年が進むにつれて、向学の精神に燃え、尋常小学校高等科、県立中学校、そして県内唯一の奨学生として広島高等師範学校（広島高師）へ進んだ。

志喜屋は、そこで数学、物理を専攻し、学問を極め、広島高師の校長の薰陶を受けて、教育者としての素養を身につけた。

広島高師を卒業したあと、明治四年四月から八か月間、岡山県金光中学校で、同年二月から三か年間熊本県鹿本中学校で教鞭を執った。教壇にたつ志喜屋は、常に自信を持つ子どもたちの指導に当たつた。沖縄県内

ときも、分からぬ者には大声で叱咤し、校長室に呼んでさとすこともたびたびであった。

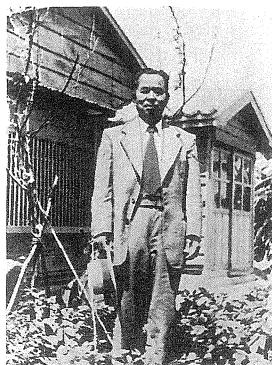
課外授業も積極的に行つていた。教学校の先生にあだ名はつきものであるが、志喜屋校長は、「ライオン」と呼ばれ、それはまさに獅子のごとくほえまくる様にピタリのあだ名であった。

私立開南中学校を設立

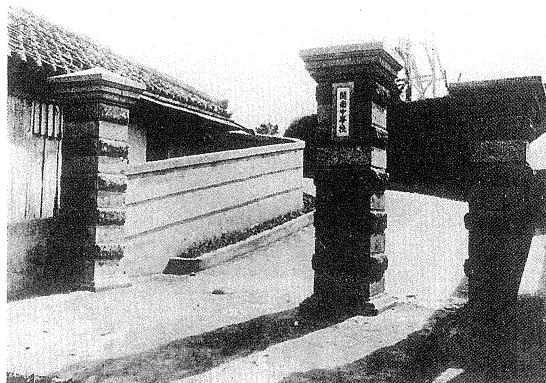
志喜屋は、県立二中の校長を辞し、昭和一年四月、那覇市に私立開南中学校を設立し、自ら理事長、校長の任に当たつた。私立中学校の設立の陰には次のような理由があつた。

県立二中は、年々施設も充実し、勉学にスポーツにその名を高め、県下の学生たちのあこがれのまどとなつていた。そのため受験生は、入学定員を大きく上まわり、向学心に燃える多くの若者たちが学問の道を開ざされていた。志喜屋は、これに深く胸を痛めていたのである。また、當時、狭い沖縄から本土や海外に飛びしていく若者たちも多かつたが、こうした青雲の志を抱いて旅立つていく若者たちに一定の知識教養を身につけて送り出したいと、志喜屋は、日ごろから熱い思いにかられていたのである。

志喜屋は、アメリカ合衆国カリフォルニア州において大成功をおさめた西原村出身の中谷善英氏の援助をおおぎ、私財を投げうつて開南中学校を設立したのである。



1948年、那覇市の自宅の玄関先で
カメラにおさまつた志喜屋孝信



志喜屋孝信が創設した開南中学校の校門

県立第一中学校長時代

明治四年一二月、志喜屋は、沖縄県立第一中学校に高良隣徳校長に請われて赴任した。

県立第二中学校は、當時唯一の中等教育機関であつた県立中学校に希望者が多く、収容できなくなつたために首里城内に分校として設置されていたが、明治四年四月に分離独立した新設校であつた。県立中学校は第一中学校と改称された。

志喜屋は、この県立第二中学校で、大正一三年三月まで教諭、教頭を務め、同年四月、第四代校長に昇任した。

志喜屋校長は、英才教育を教育方針として、いかに多くの生徒を上級学校に進学させるかを目標にしていた。それは目に見えて成果があがり、進学率は、常に県内でも上位を維持していた。

志喜屋校長は、師弟教育にきびしくのぞみ、成績順に席を決めるなど指導を徹底した。クラスをのぞけば、成績の優秀な者は、一目で分かるようにしたという。他の生徒に刺激をあたえるためである。自ら教壇に立つ

志喜屋は、開南中学校では英才教育に合わせて個性を尊重する教育を重要視した。また沖縄の発展は、海外移民によらなければならぬとして、移民指導者の養成を目標のひとつに添えた。そのため入学年齢の制限を撤廃して、海外の移民二世にも門戸を開いた。このように開南中学校は年々充実して、入学志願者も定員の二倍、三倍とふくれあがつていった。

しかし、順調な発展をとげてきた開南中学校も、昭和一九年一一月一〇日の空襲のため校舎を焼かれ、爆撃から免れた一部の校舎も日本軍の病院に使われたため、どうう最後の卒業式は挙行されず、そのまま廃校の歴史をみたのである。

郷土の再建

昭和二〇年六月、鉄の暴風が吹きあれた沖縄戦が終わった。沖縄を掌握した米海軍は、戦争で混乱した住民の秩序の回復と、長期的な占領政策のために、住民の自治組織として、また軍政府の諮詢機関としての機能を担う「諮詢委員会」を同年八月に設置した。各地区の収容所から有識者が集められ、委員長や幹事、部長などが選任され、委員長には志喜屋が選ばれた。

さつそく一五名の委員は、米軍車両に乗つて、各地区の状況を視察した。二十五万人余の犠牲者を出した沖縄の戦場は一変していた。興のために身を挺して取り組んだ。

特に農家の出身であつた志喜屋知事にとつて農民たちへの思い入れは深かつた。無償配給であつた食糧が有償になり、賃金制がしかれるようになると、農民と俸給取りとの格差がでてくるのは目に見えていた。

そこで知事は、民政部内の部長会議で俸給からの農村復興への一部拠出金を提案、軍政府にその旨申請した。この申し出を聞いた軍首脳は、いたく感動し、志喜屋知事の人道的な誠意に敬意を表して、一五〇〇万円の農村復興計画予算をプレゼントした。これは民政府総予算一億何千万円の約一割に当たる大金であった。

琉球大学創立の礎を築く

一九五〇年九月一七日、郡島知事選挙が行われ、平良辰雄氏が公選知事に選ばれた。沖縄民政府は、沖縄郡島政府に改称され、沖縄の政治は新しい方向へ進んでいくことになつた。

志喜屋は、政治の場から再び教育界に入り、戦後の混沌とした社会情勢の中で、沖縄復興のために身を挺して掛けた五年間の労苦に対する軍政府の配慮と、教育者としての誠就任した。



民政府創設のころの志喜屋知事（知事室で）



沖縄諮詢委員会のメンバー前列左より3人目が志喜屋孝信

民政府知事として

一九四五一一〇月三〇日、これまで収容地外への移動を禁止されていた住民に、待望の元居住市町村への移動が許可された。当然市町村における地方行政が必要となり、軍政府は、市町村長を任命して各市町村の統轄に当たらせた。これらの市町村の中央執行機関としての民政府が創設され、知事に志喜屋が就任した。沖縄県人が知事に就任するのは、戦前戦後を通じて初めてのことであった。なお、民政府の誕生に伴つて、諮詢委員会は解消された。

民政府といつても、軍政府がすべて実権を握つており、自力で住民施策を執行することはできず、單なる軍の代行機関にすぎなかつたが、それでも志喜屋知事は、郷土の再建復興が高く評価された学長の座であつた。志喜屋は、「粉骨碎身、大學設立の使命達成に全力を尽くしたい」と決意を新たにしていた。そして、大學の諸規程の制定、施設の整備、教授陣の充実強化など寝食を忘れて奮闘し、創學の礎を築いた。戦前四〇年間、教育一筋に歩んできた志喜屋にとつて、最後の奉公となつた琉球大学長の座は、水を得た魚のようであつた。

一九五二年六月、任期満了により大學を退任したが、学長在任中にスタンフォード大学からドクター・オブ・ヒューマニティ（博愛人道主義者）の称号が贈られた。また、のちに志喜屋の業績を称えて琉球大学内に「志喜屋図書館」が設けられた。

一九五五年一月二六日、「浅学非才の私が……」と常に謙虚な姿勢で世に処し、我が身の勞苦に一片の見返りも求めず慈父のごとく愛情豊かな人道主義者であつた志喜屋は、幾多の人材を世におくり、郷土再建の難事業に生命をかけ、県人としてたぐいまれなる偉業を残してその全生涯を閉じた。享年七二歳であつた。

（眞志川市教育長 照屋寛吉）

特に中南部は、一草一本もない焼け野が原と化し、戦前の木もかけをひとかけらも残さず、戦争のおそろしさをいやというほど思い知らされた。緑豊かな郷土の再建の日は果たして送つた。それには①分散家族の居所を至急判明するよう講ぜられたし②各地区とも医薬品の不足をきたしているからこれの整備をされだし③火葬場の設置と棺桶の準備をせられたし、など一四項目に及んでいた。